

錦木

宮本百合子

青空文庫

(一)

京でなうても御はなは咲いた

恋の使の春ハルの小雨が

たよりもて来てそとさゝやけば

花は恥らふてポト笑んだ

京でなうても御はなはさいた。

にわかにあたかき、夢から現にかえつたように、今更事々しく人の口葉にのぼる花見の宴をはる東の御館と云うのは、この里の東の方を一带にのこつて居るみどりの築土あるのがそれ、東の

御館と呼んでも、この人とぼしい山里に対して呼ぶべき西の館もなく、其の名はただ、里の東方に有るからのわけで有る。館の殿と云うのは二十の声をおとしきいたばかりの若人、ともにすむ母君と弟君、二人ながらこの世の中に又とかけがえのない大切な一人きりの方達で有る。有つて都合の悪いものと云えば誰でも知る居候、大家のならいこの御館にも男二人女二人のかかり人。

二人の男君は三代前の何とか彼とかの面倒なかかり合から、働くのもつらし、これ幸と一人前の大男が二人までのやつかいもの。二人の女君は後室の妹君の娘達、二親に分れてからはこの年老いた伯母君を杖より柱よりたよつて来て居られるもの、姉君を常盤の君、若やいだ名にもせず、見にくい姿で年は二十ほど、「

『誘う水あらば』って云うのはあの方だ」とは口さがない召使のかげ口半分はあう□□□□半分はうそのようはなしで有る。妹の君は紫の君と云って今年ようやつと十六、もの事のよくわかった、姿のきれいなしつかりした情深い姫君で有る、「瓜を三角にきつてもこうはちがいますまいものをネー」かげ口で有る。

「先代をくわしく知るものはないがなんでも都の歌人でござったそうじやが歌枕とかをさぐりにこのちに御出なさってから、この景色のよさにうち込んで、ここに己の骨を埋めるのだと一人できめて御しまいなされ京からあとりりの若君、——今の殿が許婚の姫君と、母君と弟君をつれて御出なされて間もなく先代は御さられ、今の殿が寝殿に御うつりになったと云うはなしでござります

るが」京から来る旅商人などにきかれてこの土地の一番年よりかぶの爺はこうこたえるのがつねで有った。

二人の女君もうとしごろ弟君も、比まれに姿も心も美しく生い立ったので「よいよめ良いむこなりともさがさねばならず……」あとにのこった若い殿の後見をしながら段々年頃になつて行く大切の三人の片はつけずばならず、末の長い弟君にも出来るだけ出世をさせたしと年をとつてよけいに苦勞性になつた後室はそのことばかりを苦にやんで居る。

「いつそ一思いに三人を京にのぼせようか」

とも思つて見られたけれども「久しい間こんなところに暮して居て時にもおくれただろうから若ものに恥かしい思をさせるのも可

哀そうだし」と思つて心の内では「弟君には彼の紫の君でもめあわせて居候の兄弟には常盤の君と自分の見て置いた若くて、美しい女房を、そして子でも出来たらこの子を京の身よりにしたので育ててもらえば」と心にきめて、たるんだような心持で居ながらも、その淋しさを忘れようために花、紅葉、などの宴は、いつも晴々と行つて居られるので有る。

祭にも出られず、出仕も出来ない若い男や女房はこの折々をそれにかえて衣服の見せっこ、きりよふのくらべっこ、をしてよろこんで居るので有る。

片山里に住むとは云え風流ごのみは流石京さすがの公卿、広やかな邸の内、燈台の影のないのはおぼろおぼろの春の夜の月の風情をそこなつてはと遠くしりぞけられて居るためで、散りもそめず、さきものこらず、雲かとまがう万朶ダの桜、下には若草のみどりのしとね、上には紅の花の雲、花の香にようてかすむ月かげは欄干近くその姿をなげる。

一刻千金も高ならぬその有様をまともに見る広間はあけはなされてしきつめられた纏縷マユべりの上をはすにあやどる女君達の小机帳は常にもまして美しい。

正坐にかまえて都人の華奢な風を偲ばせて居るのは殿、その下

坐に弟君、かかり人までこの宴にもれず、仮面もかぶらずにひかえて居る、それからは年の順、役の順に長年忠義劣りない家の子、家臣の一番上坐に、殿のみどり子の時からつかえて今に尚、この頃めずらかな業物を腰にうちこんで領地の見まわり、年貢のとりたてと心をくぼる御主大切に自分の命を忘れて居る老人、さつきまでの苦労を夢のように、しわの深いかおに笑をあふれるほどたたえて成人した殿兄弟をながめて笑つぽに入つて居る、この老人もこの席の中では目出つ人の一人で有るが明星の前の太陽のようにまばゆいほど目出つ二人の君が居る、一人は弟君、一人は紫の君で有る。家族の中の男どころか世の中すべての男よりも勝った美しくしさとやさしい思をこの胸にたたんで居る弟君は誰もその名

親のつけた名を云うものはなくてこの頃噂にたかい物語の主人公の名をそのまま呼んで「光君」、二十を一つ前の花ざかりの年で有る。

殿の左かわには後室北の方、二人の姫、女房達花をきそつて並んで居る、いずれも今日をはれときかざつて念入りの化粧に額の出たのをかくしたのもあれば頬の赤さをきわ立たせた女も少くない。

なまめいたそらだきの末坐になみ居る若人の直衣の袖を掠めると乱れもしない鬢をきにするのも女房達が扇でかおをかくしながら目だけ半分のぞかせては、陰から陰へ、

「マア御らんなさいませ、あの弟君を！ マア何と云うネエ、：

…」

と目引き袖ひきするのもあるのを上からのぞく御月さま、「ても笑止な」と思うで有ろう。あまた数多の女達の中であざみの中の撫子かそれよりもまだ立ちまさって美しく見えて居る紫の君は扇で深くかおをかくして居ながらもその美しくしさをしのばする、うなじの白さ、頬の豊けさ、うす紅にすきとおるような耳たぼ、丈にあまる黒かみをなだらかにゆるがせておぼろ月のかげを斜にうけ桜の色の□□を匂わせて居るようすは何と云ったらこの美しくしさは云いつくされるかと思われるほどで有る。男達はまばしいものを見るように曲の多い管絃をはなれた心と目とをこの女君にむけて居た、けれどもまともに見ることは出来なかった。弟君、いくら美

くしいと云つても人なみの心地と、若さにその若さをほてる様にドキンドキンと波うつあつい血しおを持って居た。一目見て「得がたい美しい方じゃあないか」若君の心の片いつ方にひそむ何し知れない虫はささやいた。その小さい虫は光君の目に糸をつけて時々紫の君の方にひっぱる、見る毎にそのかがやかしさはますます、花の精が管絃の声にさそい出されて現れたのではあるまいかそれとも又春の月姫が天下つたのでは？ と讚美する口葉の、丁度したののみつからない光君の心は人の世、この世の中にないものにまでそのめでたさをたとえて居たが若い頭の中を一つぱいに占領してはげしい形容詞をもとめて居る、美しくいと云う感情を満足させる事は出来なかった。紫の君の何も思わぬげなおつと

りした目を見たせつなに「今に私の人になる人なんだ」

と思つた光君の瞳はもえるようにかがやき初めた、その光のあるその目の前には美しい、可愛い、忘れられない紫の君の姿をやわらかく包んでかげろうがもえて居る。そのかげろうの戦といつおののきしよに光君の心もかるくうれしさにおののいて居る。夢のように、いつの間にか今日の名残の春鶯囀も終つて、各々の前には料紙、硯石箱が置かれた、題は「花の宴」

頭を深くたれて考え込むものもあれば色紙の泣きそうな手で遠慮もなくのたらせるものもある。書かれる可は三十一文字だか四文字だか分らないがその勢は目立ったもので有る。若君はあふれた水を流すよりもたやすくそのみちみちた心のたったほんの一寸

したところを墨の香をこめてかきながした、やさしい手でこす□
□□□色紙を形よくあやなして居る。

〔二行分空白〕

と云う歌を見つめながらうれしい心をしみじみと味わって居た。

後室の披露ははじまった、男君は誰よりも一番女君の歌のよいようにと祈って居た。自ぼれの強い女がこれならと自信をもつて居た歌が一も二もなくとりすてられたのをふくれてわきを向いて額がみをやけにゆらがす女もあるし意外のまぐれあたりに相合をくずすものもあるなどいずれもつみのない御笑嬌で有る。この人達の中で月と日とのようなかがやきをもった二人の歌はよまれた。女は男君の歌の一番よいようにと男は紫の君の一番立派に出来る

ようにとのぞんで居た通り女君、男君の哥は美しくしさの目立つと同じほどの力をもつて居た。

〔二行分空白〕

と云うやさしい女性らしい哥の句をくりかえしながら人々は二人の仲をいろいろに想像しながら又、この栄の有る二人をねたく思いうらやましく思いながら一寸は賞讃の声を止めなかつた。沢山のうたはその出来の順に下枝から段々上枝へとさげられた、一番高い花の梢に若い男がその女君の色紙をそうともちながらほうばいに抱かれてつるすのをうらやましく、あの手の指に身をそえたいと光君は思つた、今日の宴も終となつた。

人達は舞の手ぶり哥のよみぶりを批評しながらなごりおしげに

桜の梢をふりかえりふりかえり女達は沢山かたまつて薬玉のようになつて細殿の暗い方に消えて行く、一番しんがりの一群の男のささきげんでつみもなく美しい直衣の袖を胡蝶のように舞の引く手、さす手もあやしげにやがてその影も小さくなつた時月の影の一人さまよう階をおりて桜の梢をうつとりと女君の色紙の墨の香に魂をうばわれること小半時、やがて夢さめたようにそのうたをくりかえしながらとつかわくきびすを返す人を見ればその美しくい姿はまがいもない光君であつた。

「此の間の宴の時に五番目に居た女君は、よく噂に出る紫の君つて云う人なのかしら」

くつろいだ様子をして絵巻物を見て居た光君は、はばかりようにおもはゆげに誰にともなく云うと、わきに居た髪的美くしい年まがうけとつて、

「エエ、そうでございます、大奥様の御妹子の御子で御両親に御分れなさってからこちらに御出になつて居るんでございますよ。今年の始めに雪のある中を御出になりましたのですもの。女達は御いといいと云つてねー、ほんとうに泣いたのでございますよ。ほんとうにいくら御姉妹が御有りだと云つて彼の姉様なんかはまるで何なかたで却つて妹様ばかり御苦労なさつて居らっしゃるん

でございますからねー、空は晴れてもまだ雪の消えなくて空と土面との境はうす紅とうす紫にかすんで、残った雪の銀のようにかがやく月に奥床しいかざりの女車に召して御出になったのでございます。そしてこれから御そばに召えようとする女達一人一人にかずけるものを遊ばして、

『これから又、いろいろ御世話になる事でしよう、二人でね——御気の毒ですけれど、どうぞね——』

とおだやかなうるんだ声でおっしゃったって女達は、

『どうしてあんなに御気が御つきなものでしよう、御姉さまは何もあそばさないのに一人でね——、どうでも私達は姫様によく御つかえしなくてはもったいないわけですワ』

と云つてあちらからついて来た人達ともよく折合て御つかえして居るんでございますよ」

「随分度々、母様などの噂にきいて居るけれ共そんなことは誰も今まで云つて居なかつた。そいでは随分苦勞もして来た人なんだネー」

「エエエエもう、まだようやつと御十六に御なりなんでございますが、御考も御有りになり学問も身にしみてあそばして御いでですから御姉さまより御苦勞が多くていらつしやるんでございますよ。御歌なり、御手なり、音楽なり、御手のものでございますよ。この間中の女君の中で一番かけのない御方でございましょう、そんなことを申しては何でございしますが若奥様よりもよっぽど何で

「ご致しますよ」

女はまじめな熱心な様子ではなしをつづけて、

「ネ、若様、あの方なら貴方様の御方様に遊ばしても御立派でございますよ、御よろしければ……」

からかうように女は云つて光君のかおをのぞき込んだ。

「マア、そんな事は云つこなしに御し、困るもの」

小さい声で云つてぽつと頬を赤くした。まわたにくるまつて育つた処女のように心の中で、

「私の心をして居るんじゃないかしら」

と見すかされたような心地がしてその視線をさけるように又巻物の上に目を落した。此の頃光君は、何となく淋しい悲しい心のど

こかにすきの有るような心持の日がつづいた。光君は、美しい色の巻物をしげしげと見ながらしずかに自分の心にきいて見た、「何故こんなに淋しいんだろう、もとと同じに暮して居るのに」そう思つて心の中に住んで居る小さいものにきこうとしてフト何か思いあたつたようにそのほほをポツと赤くしてひそんで居るものを見出して居るようにあたりを見まわした。

「ネー若様、この頃貴方様はどうか遊ばしましてすネー。私達にはもうちゃんとわかつて居ります。もうちゃんとおつしやったらようございましょうものをネー」

ほほ笑みながらさっきの女は若い小さいものをいたわるように云う。

「変だつて、何にも自分には変な事はないんだけれ共、わかつてるつて何が分つて居るの、おしえて御呉れ」

「御自分の御心に御きき遊ばせ、世の中の若いまだ世間を知らない方なんと云うものは、とづくに人の知つて居ることをなおかくそうかくそうと骨折りをしてその骨折がいのないのを今更のようにびつくりするかたが多いもんでございます。貴方さまも其の中の御一人でいらつしやいましょう」

「そんなことはきつとない、だけれ共ネ……マア好い、もうそんな事は云いつこなしき」

光君は居たたまれないようにクルクルと巻物を巻いてわざと、机のわきにすわつて、思い出したように墨をすつて手習をはじめ

た。女はそうと立つて行つて光君の肩越しにのぞくとこの間の宴の時に紫の君の詠んだうたを幾通りにも幾通りにも書きながして居たので、何か見出したようにかるくほほ笑んでかげに行つてしまつた。こんなにえきれない、うつらうつらとした日を光君は毎日送つて居る。

毎日きまつた事はちゃんちゃんとして行つてもあと柱にもたれてボンヤリして居たり何かもうどうしても忘れない事をしいてまぎらそうとするように、涙の出るような声で、歌をうたつたり、琴をひいて居たりして段々何となく物思わしげな病んで居るような様子になつて、三度のものなどもあんまりはかばかしく進まなくなつた。女達はもうすっかり察して居るので、

「御かわいそうにネー、もう皆知つて居るんですもの、そうおつしやりさえすれば大奥様に御相談してどうにでもなるものをネー、又そこが御可愛いんだだけ共」

「何だか物語りにでも有りそうじゃありませんか、ネーそして夕方なんか、あの姿でうす暗いなかにうなだれて居らつしやるどころなんかはまるで絵のようです」

なんかと云い合つて居る。

「ネー若様、ほんとうに大奥様に申し上げてもよろしいでございましょう、そうすればどうにでもなるんでございますもの」

と乳母はそれに違いないと思つたので云つて見たがやつぱり、
「そんなことを幾度くりかえして云つて居るんだらう。本人がそ

うでないって云つたら一番たしかだのに、ネ」

といかにもいやそうに云うのでそれならず、どうしたら好かろうと迷つて居る。この頃、気分がはつきりしないと云つて朝から、被衣かぎぎをかぶつてねていられるので乳母はどうとう大奥様——光君の母上のところに云つてやった。

「私からじかに文なんかをさし上げてましてまことに失礼でございますが若様は何だか少し御様子が常と御変りになつていらつしやります。彼の花の御宴の時からと申し上げましたら大抵御心あたりの御有りあそばす事と存じます。私もいろいろ申し上げて見ましたが何でもないとおつしやるばかりで……」

どうぞ大奥さまから御文でも若様に下さいますように、この頃

のうちしめった御天氣の中で心配を持ってくらして居ります私の心も御察し下さいまして」

とこんなことを云つてやったんで母君のところから、家中で一番可愛いと云われて居る童が見事な果物にそえて文をもつて来た。面倒くさそうによんで見ると、

「乳母のそこからの手紙に貴方の気分がすぐれないようだと言つて来ましたが、もし体がわるければ典医を上げてても好い——氣に入つた僧に御いのりをしてもらうてもいいでしょう。若い人にあるり勝のことではなやんで居るのなら親身の私だけにおしえて下さつてもいいでしょう。出来るだけの事なら力もそえましょうしネエ、どうぞ私にかくしたことをそう沢山持たないようにしてこの老と

った私に心配させないで下さい」

と書いてあつた。光君は、あんな枯木のようになつた、血もなんにも流れていないような母君にどうして私の思つて居る事を私の満足するようにすることが出来るはずがないと思ひながらそのつやのない墨色を見て居ると、

「御返事をなさらないでございますか、何とか申し上げましようか」

ときいて居るのに、

「有難うつてネ、云つてお上げ」

と云つたきりでまただまりかえつて居たけれ共夜が更けると一緒に段々目がさえてこまつたと云つて当直の女をあつめていろいろ

な世間ばなしをさせたり物語りの本をよませてなど居たけれ共中々ねむられそうにもなかった。

いろいろのはなしの末に一番まだ年若なつみのない女が、

「この頃ネー、西の対の紫の君さまのところへ」

と云い出したのを一人の女がおさえつけて、

「ほんとうに紫の君は珍らしい御方でございますことネー」

と云い消そうとして云ったのを光君はすぐきいてしまったのでだまつて衣のはじをひっぱって居た手をとめて、

「もう皆に知られてしまったからかくすのはやめにした、だけれどいろいろな事を云ったり笑ったりしちや私が困ると思つて居たんだから」

と云つてよこを向いてしまふ。女達は皆目を見合つて急に荷散るやうに笑い出したら光君までまっかなかおをして笑い出してしまつた。

「若様、大丈夫でございますよ、そんなこと」

と云つてまだオツホホホと笑つて居る。彼の年まは一番笑いこけながら、

「ネーやっぱり私が目が有つたでございましょう、でもよく今までもちこたえて居らっしゃつたこと」

なんとかと云つてひやかして居た。光君は氣が狂つたやうに笑つたりふさぎ込んだりして夜を明してしまつた。

翌日はまた春に有りがちなしとしと雨が銀線を匂やかな黒土の

上におちて居た。落ちた桜の花弁はその雨にポタポタとよごされて居る。

光君は椽に坐つて肩まで髪をたれた童達が着物のよごれるのを忘れてこまかい雨の中を散つた花びらをひろつては並べならべてはひろつて細い絹の五色の糸でこれをつないで環をつくつて首にかけたり、かざして見たりして居るのを何も彼も忘れたように見とれて居た。気のきいた子が一番念入りに作つてあげた環を光君は、はなされないように自分の前にならべて置いていろいろのことを書きつけてそれにむすびつけて居た。その中には、

花散ればまぢりて飛びぬ我心 得も忘れ得ぬ君のかたへに
悲しめる心と目とをとちながら なほうらがなし花の散る

中

かなしめばかなしむまゝにくれて行く　春の日長のうらめ
しきかな

などと細い筆でこまかい紙にかいては白銀のような針でつけて居る姿を女達は、「ほんとうにまるで絵のようです事」と云い合つて居た。

灯のついてから西の対の童が、

「貝合せをするからいらっしやつてはいかが兄君も二人の娘も見える筈です」

と云う文をもつて来たので早速衣をととのえてよろこびに戦く心をおさえながら母君の部屋の明障子の外から、

「ごめん下さい私です」

と声をかけると声のやさしい女は細目にあけて黛を一寸のぞかせ
て、

「ようこそ、どうぞ御入りあそばして」

と云つてすぐ几帳を引いてしまった。

「よく来て下さったこと、今に兄君も常盤の君も紫の君も見える
でしょうからね」

とうれしそうに云いながら女に自分の几帳の中に方坐をもつて来
させてその上にすわらせて一年毎に美しくしさのましてかがやかし
くなつて来る子のかおを見ながらいろいろのはなしの末こんなこ
とを云い出した。

「貴方この頃どうしたの、かくさずと教えて下さいナ、大抵は私だつて察して居るんだもの」

「別にどうもいたしません、何を察していらつしやるの？」

「だからかくして居ると云うんですよ、貴方は思つてゐる人が有るんでしよう」

「有つたつてなくつたつてそんなこと……いくら貴女が心配して下さつても人の心は思うようになりませんもの」

「だつて、そんなに云うのがいやなら、何だけれ共——どうにかなるかと思つたものでネー」

光君は母君の自分をいかにも子供あつかいに何でもかんでも自分で世話しようとするのがいやなような心持になった。

「こんなことで段々私達母子ははなれるんじゃないやああるまいか」

こんなことも思つて見た。

「何でもかんでも母にきかせてよろこんで居られない自分は不幸なのかも知れない」

こんな思いもあとからわき上つた。いろいろな思いはわかい柔い心の前をはやてのようすぎて行く。光君はだまつて目をつぶつて心をしずめようとして居るところへ兄君が入つて来た。

「オヤ、マア、珍しい方が見える。貴方はこの頃大變風流な御病氣だそうだけれ共まだ死んでは割が悪そうですよ」

坐りもしない内からこんなことを云う。

「そんなことをおつしやるもんじゃありませんよ、私は何でも

なくつてもはたでそうきめてしまふんですもの」

幼心な光君はまがおになつて云いわけをするとそれを又からかつて笑いながらからかつて居る。

「貴方の姿が美しくいと云つて沢山の女達が思つて居ると云うことですネー。私なんかはどうかして思われようとつとめてさえどうしたものかたれも思つてくれない、たまに思つてくれる人が有ると思えば下の下のうずめの命よりなお愛嬌のある人なんかなんだもの、貴方はよっぽどまわりあわせの好い日に生れたに違いないネーそうでしょう」

「まわりあわせが好いんだかわるいんだかわかるんですか、人思うよう思わせておきましょう」

「大變さとしたことだ事、でもさとりをひらいたようできとれな
いのが人間の好いところだもの」

こんなことをいい気になってしゃべり立てて居る。

「一体女なんて云うものはいろいろ男に察しのつかないところば
かり沢山有つてね」

いきなりとつてつけたようにこんなことを云い出す。

「そうでしょか」

光君は幼子のようにびっくりしたかおをして話をきいて居る。

「だけれども又そこが好いところかもしれない。やたらにものをか
くしたがったり、下らないことに泣いたり笑ったりほんとうに不
思議なものだ、貴方はそう思わない？」

「思う思わないって、そんなことがわかるまで女の人につきあったことはないんですもの」

「つきあったことがないって、マア随分うまいことを云っていらつしやること、あんまりつきあいすぎて何が何やら盲になつちやつた方らしいくせに」

兄君はこんな皮肉を云つてその女のようなでがたをつつつく。「おやめなさいよ。そんなこと、母様が何と思つていらつしやるか」

おじたように母の方をぬすみみるようにする。

母君はだまつてほほ笑みながら仲の好い兄弟をうれしそうに見て居る。

「ネー母様、ほんとうにそうですネー。云つちやあ悪いんでしよ
うか此の人はどこまでもしらつとぼけて居るきなんだから」

「マアマア、そんなに云うのは御やめにしてネ。少しはこのごろ
の様子でもはなして下さいよ。私年とってからのはあんまりほかの
人の部屋にもゆかないんでネ」

「また母さんの年よつた年とつたが初まつた。人つて云うものは
妙なもので死ぬ死ぬと云う人は死なないもんで年とつたと自分で
云う人は案外年をとらないもんでネー」

兄君は達手にこんなことをしゃべつて笑い興じて居たけれ共二
人とも別に何とも云いかえしてもくれず只柳のようになげながし
て居るので張合がぬけて二人のわきにぴつたりとすわりながら同

じように美くしい形容をもちながらまるであべこべの心地をもつて居る自分達二人の身の上を思つて居た。

そこへそとからやさしい声で、

「ごめん下さいませ」

と云つて入つて来たのは声に似げない姿をした常盤の君で有る。

なさけないほど肉つきの好いかおに泥水のようなほほ笑みをいっぱいにたたえて片ひざをつきながら、

「只今はどうも、わざわざ恐れ入りました」

声は前にかかわらずやさしいけれ共「その様子では可愛いどころか一寸好いなんかと思う人が有つたら天地がさかさになつてしまふだろう」兄君はその美くしい眼にかるい冷笑をうかべながらこ

んな人のわるいことを思つて居た。

常盤の君はわきに居る人をはばかり様子もなく兄君ばかりを相手にしてしやべつては高笑いして居る。「人もなげな様子をして居る人だ。人にすかれない人にかぎつて斯うだから、世の中は不思議だ」まだ年若なくせに光君はもう年よつたようにこんな世間なれたようなことを思つて居た。まるであくどいにしき絵をおしつけて見せられる様な心持でたまらなくむねが悪くなる。早く紫の君のあのかがやく様な姿が見えれば好いのにとはだれでもが思つて居ることの有つた。

「紫の君はどうしたんでしょね。貴方は存じない？」

母上が口をきつた。光君は千万の味方を得たようにその方を向

いた。

「どうしたんでございましょうね、あんまり御またせ申して居りますこと。ほんとに持つて居る自分のねうちよりもよく見せようと思うには仲々手間の入ることとでございましょうから」

常盤の君は自分の妹の美しくしさをねたんでこんなことを云う。

「それでもやつぱり女なんて云うものは、出来るだけみにくいところはかくした方がよいと思われますネー。どんなにかくしてもかくしきれないほどもにくい人はそりや別としてね」

自分の思つてる人をごとごと云われた口惜しさに光君はこんなぶつつけたようなことを云った、女君は自分のことを云われたときがついて一寸むつとしたが又いやな笑がおにかえつて、

「何だか私の御蔵に火がつきそうになりましたワホホホホ」

とつつけ笑いをしてこんなことを云った。

光君の、どつちかと云えば幼心な世間知らずの心には、このとりすましたような女の口ぶりや姿がそのみにくいよりもいやでたまらないのでその本性をあらわしてくるりとうしろむきになって半分ねそべったような形してよつぽど古い、所々虫のくつたあとの有る本をよんで居る。

女は、

「御ねむりあそばしたの。御氣にさわりましたらどうぞね」

こんなことを云って兄君と又しきりにはなし出す。

そのはなしのところどころにきこえる、

「紫の君」

と云うのに妙に氣をひかれて目は本の上に有りながら心はそつぷにとんで居る。話はなんでも紫の君の噂にきまつて居る、どんなことを云うかしら、又どんな噂をされるほどの人かと光君の心はあてどもないことにおどる。

「ホホホホ、もう御やめあそばせ。実の親よりあの方のことを案じていらつしやるかたが有るつて云うはなしでございますよ」

「ほんとうに、うっかりして居ましたね。壁に耳有り障子に目あり、油断のならない世の中だのにネハハハハ。でもいいじゃありませんか、別に悪口を云ったわけではなし、只まるで石か木のような人と云ったばかりですものネ、そんなにうらまれもしま

すまいよ」

光君は急に鋒先が自分の方に向ったのでびっくりして今更のよ
うに赤い頬をすると急に障子の外から、

「御免あそばして、……紫の君のところから御使にまいりました
が」

まだにごりをおびない澄んだ童の声で有る。やがてとりつぎに
女が出た様子で小さい声で何か云いあつて居たが、

「それではよろしく御つたえ下さいますように」
と云つて童はかえつて行つた。

やがてとりつぎをした女は皆の前に出て丁寧に手をつかえたま
までやさしいこえを出して、

「只今紫の君さまのところから御人でございまして斯う御言つけがございました。

御まねきはまことに有難く、とんでもよりたい心でございますがあやにく少々気分が悪いのでふせっておりますし又ほんの少しではございますが熱が有るようでございますからまことに何でございますか今は失礼致しますから。

斯う云う仰でおおせございました」

と云つて首を上げるのを見るとさつき光君の時障子をあけた女で有る。立とうとすると物ずきな兄君は、

「どうもごくろう、よくわかりました。さて御前は大層やさしい声を御もちだが、どこの御生れかな」

わざとこえをかえてしかつめらしくきくと若い女はたまらなそうに笑いこけながら、

「マア殿さまハ、何を仰せあそばすかと思えば、私なんかはもうもうお山のおくのおく、山猿といっしよに産湯をつかったのでございますもの」

割合にはつきりした言葉で返事をする。

「するとその可愛い声も山猿の御伝授をうけたと云わるるわけだな。さだめし月のある谷川で叫ばれただろうし日のてる木の枝でもなかれただろうな」

又前と同じ調子で有る。

「さようでございますとも仰のとおりに暮しましたので色はこの

通りまつくろかおはこのようにみにくうなつたのでございます。
もうごめんあそばして」

女は口がるにこんなことを云つて几帳のかげに行つてからおさ
れるように笑つて居る。光君はそれどころのさわぎではない。つ
きとばされたような心持でじつと自分の着物のあやを見て居られ
る。はしやぎきつた兄君は光君の背をポンと一つ叩いて、

「どうなすつた？　この御人形のような御方、今の女は可愛い声
と姿をしながら貴方には悪いしらせをしましたね、御きのどくな」
「でも死んだわけでもなしハハハハ、マア、御あきらめあそば
せ」

なぐさめるように、また馬鹿にするように云う。

光君はだまつたまま只頭をふつて居る。かおはまっかになつて目はうるんで居る。兄君は又そうつと手をはなして女君とかおを見合わして押出したように笑つて居る。

「もう来ないときまつた人をまつて居ても甲斐のないことだから始めようじやありませんか」

光君は人が口をきいて居るような心地で云つた。

女は今更のようにどよめきたつて、居ないと思つた女達まで出て来て笑いどよめきながら貝合せをはじめ。光君は他人の手のうごくように夢中で面白味もなくやるのでつづけさまにまける、つづけてまけることはよけい光君の心をいらいらさせるばかりである。女達や兄君は興にのつていつまでもいつまでもつづけて居

る。遊びのおわったのはもう灯のついてからよっぽどたってからで有った。

遊びがすんでもまだ光君はどうも居どころがないように思われてしかたがないんで母君の几帳のかげで方坐の上によこになったまま、女の白粉のかおりや、衣ずれの音に夢のように紫の君のことを思つて居た、ただ思つて居ると云うだけでそれを深く研究するでもなく、自分の心をかいぼうして見るでもなく只思つて居るばかりで有った。見た夢をまたくり返して居るような心地で、――

兄君がかえつてしまつてからは常盤の君はまだ居のこつて母君と一生懸命に碁をうつて居た。そして几帳のかげの光君に時々声

をかけては、

「いらしつて御加勢なすつて下さいナ、何だか雲行があやしくな
つてしまいましたもの」

なんかと久しい、なれたつき合いのようにたまに口を交したこと
ほかない光君にしゃべりかける。わきに居る母君等はもうとうと
うに目の中に入れてしまつて居る。

しいるようないやみな女の様子を一寸でも見たくない光君は幾
度声をかけられても身じろぎもしない。自分を孔雀のように美く
しい孔雀のようなおごりのある女だと思つて居る常盤の君は、

「ほんとうに皆さま私達によくして下さいるのに、彼の方ばかりは
ネーほんとうにどうあそばしたんでしょう」

なんとかと母君に云いかける。

「どうしたもんでしょかね、——このごろそれに何だか考え込んで居るようですからね」

「でも案外なところにほんとうの悪い人がひそんで居るもんでございますもの」

こないかにも母がそそのかして居るんだろうと云うようなことを云うんで気の小さい母君は居たたまれないような心持になつて、

「私は一寸、御めん下さい」

と云つて立つてしまわれる。常盤の君は自分のもくろんだことがあつたので気味のわるい笑をのぼせて居る。

几帳のかげの光君はこれをきいていよいよいよみな女だと思つてかおを見たら云つてやることばまで考えて居た。いきなり几帳に手をかけた女は小声ではばかりながら、

「御ゆるし下さいませ、常盤の君の御云いつけでございますから……、御用心あそばせ」

と云いながら几帳をどけてしまった。その前には常盤の君が笑をいっぱいにたたえてすわつて居る。

「何と云う人を見下げたことをする人だろう」

と思つた光君の心は、男と云う名をきずつけられたような大きな□じをいだかせら□□男の□□は光君の口のはたに氷のような冷笑をうかべさせた。そしてとりつけた人形のようにわきを向

いたまんまで居る。その様子にはほ笑んでひろげた口をすぼめて妙な目をした女は、

「マア何故そんなによそよそしい風をあそばしますの。同じ屋根の下に暮して居りますものを……どうでも少し御うちとけなさつて下さいな」

あまつたるい声で云う。光君は心の中で、

「何か云えば云うほどいやさがますますばかりだ」

と思つてなんとも返事もしない。わきを向いたままである。

「ほんとうに、どうでも少し御うちとけなさつても御そんは御有りになるまいに。私はこうしてたつた二人きりになる時をどんなに前から待つて居りましたろう」

「……………」

「まだ御だまり……」

じゃあ、私が申しましょう。私はね……私はね前から、どうかしてしみじみと御はなしをして私の心を知っていただきたいと思つて居りましたの。どうぞ御きき下さいませ」

「そうですか」光君はポツンと落ちたような返事をした。
おっこ

「ネー、私なんかは両親ともないもんでございますもの、いくら年は大きくなりましてもほんとに心細いことばかりあるんでございますよ。それでね、明けても暮れても思うのはたった一人でもたよりになる人がほしいとねーそればかり思つて居りますの。貴方無理だと御思になりますか」

「無理も無理でないも、そんなこと貴方の御勝手ですもの」

「そうではございまして、ネーそれじゃあ不□でなくしておいていただいて、そう思うんでございますの、どうか貴方になんでも私の心の内に有ることをうちあけて御相談出来るかたになつていただきたいとねー。ほんとうに心から御ねがい申すんでございますよ」

「女のかたは女相志が好いでしょう」

「そりやあ女もようございますが悲しくて涙の出るときにはいっしよに泣いて呉れるばかりでそれについて力づよいことを云つてくれるでもなければ力にもなつてくれませんもの」

「もうめんどくさい前おきはやめて早く中みをお云い下さい」

光君の声は恐ろしいまでにハッキリとキリキリした言葉であつた。

「それじゃ申します、私は、——ほんとに御恥しいことですけれども、貴方を、……御したい申して居りますの」

一寸赤いかおをして女は云いきつた。光君はだまって女のかおを今更のように見た。

女はその小さい目に獣のような閃を見せながら、

「私達のような年になってする恋は仲々発しないかわりに命がけだと人は申しますもの」

男さえも云いにくいと思うことをこの女は平気でたつた二十ばかりでこんなことを云つた。

「向日葵ハ太陽の光ならどんなささいなのにもその方に向きますが、月のどんなによくてる晩でもうなだれてしおれて居るのが向日葵です」

女は何の意味か分らないんで只だまって光君のかおを見つめて居た。

いきなりおこりの起ったように立つた光君は、

「御免下さい」

と云ったまんまその怒と、はずかしさと悲しさの三つの思の乱れにふるえながら東の対にかえってしまった。くらい灯のかげに坐った光君は、

「まるで獣のような女だ！　だれがたのまれたってあんな女を、

人を馬鹿にして居る、私は自分の胸の中に保つて居る彼の美しい貴い人まで馬鹿にされたような気がする」

などとげきして居たが心がしずまるとともに、今日の行つても紫の君のこなかったこと又いくら文をやつても錦木をたてても何のかえしさえして呉れない美しい人のことを思つてかぐわしい香の香にひたりながらふるえるようなさみしさとかなしさに涙をながして居た。くらい灯にそむいて白い頬になみだをながして居る光君の姿は常にもまして美しいあわれなもので有つた。

かゝる夜をなく虫あらば情なき 君も見さめて物思やせん
 かなしみのはてに□□しみおぼろげの 死てふ言葉にほゝ
 笑みぬ我

こんなことを小声に云いながらたえられないように自分の胸をしつかりとだいて香の煙の消えて行く方に心をうばわれて居る。

(四)

此頃の光君の様子はまるで病んで居るようで朝から晩まで被衣をかぶつて居られる。どうかして気をまぎらせたいと僧を呼んでお経をよませたり自分でよんだりして居られたけれ共有難い御経の文句も若君の心はなぐさめる事が出来なかった。さつきまでお経をよんで居た声がパツタリ止んでから今までよつぽど立つけれ共身じろぎする様子さえもないので年かさの女はそうとそばにす

りよつて様子をうかがつて居たがやがて衣ずれの音を気にしながら元の座に歸つて来ていかにも心配そうにうつむいたままで居るので女達は、

「どんな御様子でした、御寝になつてゐるのでしょうか」と云うと只女は、

「御可哀そうな事です」と云つたきりで涙を流して居る。外の女達も人にかくして思いなやんで居る心根をいじらしがつて化粧のはげるのも忘れて居た。ことに久しい間ついて居る女達なぞは、
「ほんとうにあの紫の君は憎い方だ、あの方さえやさしい心を持つて居らつしやれば君様を始めこんな悲しい思をしないものを。
あんな美しい御顔であんな強いお心を持つて居らつしやるとは

ほんとうに」と悪口を云つて居ると、

「そんなに悪く云うものではない、その強い所が彼の人の何よりも尊いところだと私はよろこんで居る。だれかの様な女は私はずきでない」

と思いがけない光君の声がしたので女達は悪いことを云つたと思つて穴にでも入りたいような氣持になつた。それから間もなく光君の泣いて居るらしい氣合がするのできつきの事でよけいに思ひがましたのだらうと思つて若い女達は「お可哀そうに」と重なり合つて泣いて居ると、

「世の中に私ほどはかない事をたよりに生きて居る人はないだらう。私はもうじき死んでも仕舞う」

と云う言葉の末は涙にききとれないほどであつた。日の落ちるまで光君は淋しさ、悲しさにたえられないと云うようにして居られたが夜に入ってから只一人うつむき勝に病上りのようにフラフラしながら細殿をあてどもなくさまよつて居るといきなり女らしいなまめいた香に頭を上げて見ると光君の躰は目に見えない何物かに引かれて西の対へ来て居た。光君は去りにくい心持になつて若しや彼の人の声はしないかしら、童にでも合えばなどとあてどもないことをたよりにしずまつた細殿を行ったり来たりして居ると傍の部屋ではしやいだ女の声で高らかに人の噂をして居るのがハッキリ聞える。

「この間の宴の時に弟君の下に居た方をお知りかえ、何と云う妙

な方だったろう」常盤の君の声である。

「誰だつて気がついて居りましたでしょう」

「中びらな御かおで」

「お齒がらんぐいで」

「出目で」

「毛がおうすくて」

「お色がくろくて」

と別々な声で云つて崩れる様に笑つて居る。此の間の晩の事を思い浮べて又今の話をきいて身ぶるいの出るほどこいやな心持になつた光君はそこをはなれてしずかに更けて行く庭の夜景色を欄干によつて見て居られたがさといふとなつた耳にフト何とも云われなく美

くしい琴の音がひびいて来た。かすかにごくかすかに夜の空氣の中をふるえてつたわつて来るその音。——白金の矢の様に光君の心をいた。光君の足は自^{おのず}と動く。耳をすまして体は少し前かがみ、足をつまさき立ててかるくはかどる。一足——一足、一足毎に近づく音はますますさえる。魂は飛んでもぬけのから、もぬけのからのその体が無形のものは益々誘う。飛んだ魂は、夜闇の中に、音に添うてはパツとはなれ、はなれてはまた添い、共にもつれてクルクルクル見えないところで舞の振事、魂がその音か、その音が魂か、音に巻かれて魂はますますとんで行く。とんでとんでとびぬいてやがてもどった魂をもとにおさめてハツときづけば、無残、しとみ戸はとぎされてその中から琴の音、ぞつとするような、

うつとりするような、抱えたような、投げたような、海の中に柳が有ったらお月様のかげの中に身をなげてしにたいような、立つて動かぬしとみ戸に影うすくよつて聞く人は声なくて只阿古屋の小玉が頬に散る。余韻を引いて音はやんだ、人はまだ動かぬ。

(五)

身じまいをしてかがやく様に美しくくなつた姿を几帳の陰になつかしいうつり香をただよわせて居るのは此の部屋の主わずか十六の紫の君である。たきしめた白い紙に象牙細工のきやしやな手を上品に手習をして居る女君の様子はたとえられない様な美しくし

さである。まわりに居るものは乳母とその娘と外に四五人みな身ぎれいにして居ながら常盤の君の部屋の女のようにはでな所はみじんなくじみにしつかりした風の見えるのはかよい女主人をもりたてなくてはと思う心づかいの結果であろう。女達は傍に女君の居るのもかまわずに此の頃の光君の様子等をいろいろと話合つて居る。少しでも云つたら女君の心は動くだろうと思つての事。「御両親さえおいでになったら今頃は女御でいらつしやつたかも知れないのに御定命とは云えあんまり何でした」と一人の女が云う。乳母の娘は、

「ほんとうに、もう御年頃でもあるし私達が御つき申して居ながら姫様御一人どうすることも出来ない」と云つては御亡くなりにな

った方にも相すまないし、又こんなところのことですから光君を置いては他に似合わしい方もいらつしやらないし」

と几帳の影を見ながら云うと他の女達もが、

「ほんとうに私達はそればかりが心配で」

と云うあとをひきうけて、

「だれでも思つて居る事です、まして先の短い私は命のうちに姫様の御婚礼の式のある様にとどれだけ祈つて居るか知れません。

何ぼ何と云つても姫様の様ではほんとうに困りますけれ共また常盤の君の様でもネ」

と遠慮のない乳母はあんまりずけずけした事を云うので娘は袖を引いて、

「マアそんな事を云うものではありませんよ。上様（兄君）だつて『この方は近頃の女に似合わないかたい心を持つていらつしやるたのもしい人だ。私の奥さんにしても恥しくない方だ』なんておつしやつたほどですもの誰だつて姫様を悪く思つてやしません」などと云うのを几帳の陰できいて居た姫は馬鹿にされたやうないやな氣持で居た。それから女達の話は急に変つて常盤の君の噂になつた。

忍び合つて通つていらつしやるかかりうどの御兄弟が弟君の来て居らつしやる所へ又兄君が知らないでしのんでおいでになつて大騒をしたの何のと面白がつて云つて居るのをきいて女君は浅間しい事だと悲くて、

「どうぞその話はここだけでよその人に話すような事はしないで
お呉、私の恥にもなることだから」

と云つてすすり泣きをして居られるので女達は申しわけのない様に
一人立ち二人立ちしてあとには乳母とその娘ばかりが残った。

乳母は今の中にと思つて女君のそばによつて几帳をすつかり立て
まわして声をひそめて、

「姫様貴方御考えになりましたか」

と生真面目な様子でさく。女君はまぶたがうす紅になつて、艶な
顔をそむけるようにして、

「幾度云つても同じ事」

と絶え入るように云つて扇で顔をかくしてしまわれる。その様子

が又なく可愛いので強いことも云えず、ぐちつぽく一つことを二度も三度もくり返してはたから見て居る自分達の心もとなさや、後のためにもなどと久しく話していたが結局は光君によい返事をするようにとすすめるのでだまって居た女君は眉の間に決心の色をひらめかせながら、

「御前は私に心にもない事を筆の先だけで云えと教えるの、御両親は私にそんな事を教えるようにと御前をつけておおきになったのだろうか」

いつにないするどい調子なので乳母はまごつきながらわびる様な声で、

「どうぞ御怒り遊ばないで下さいまし、自分の先が短いので息の

ある中に御身もきめてしまいたし私どもあんまり心配なのでつい申し上げたのでございますから。そんなに立派な御心とこんなにお美しい御姿とを御二人に御見せ申す手だてがあつたら」と泣き伏してしまったので紫の君も、

「そんな悲しい事は云わないでお呉れ、私はたよりない身なのだからもう少し立ったら、黒い着物でも着ようと思つて居るんだから」と泣きながらも取り乱した風の無いのを乳母は又「何と云うけなげな方だろう」と思った。女君は額髪をぬらしたまま被衣をかけて身じろぎもしないでいらつしやるので乳母は今更のように悪い事をしたと思つてそつと几帳の間から中をのぞいてはホツと吐息をついて居た。日暮方、明障子を細めに小さい手がのぞいてパタ

りとかるくたおれたものの音にそれと察した。女達は美くしい錦木の主とつれない紫の君の上を思つて自分がその人だつたらなどと思う女もないではなかった。送られた女君はそれを一目細い目を開いて見ただけで童のおもちやにと何にも知らない小供の手にゆずられるのであつた。

(六)

長い間うつらうつらとして寝て許り居た光君は熱の高い時などにはききとれないような声で、

「紫の君、紫の君」

とうわごとを云うほどなので女達はみんな、

「何の因果のこんなうきめを見るのだろうか」

とその声のきこえる毎にうつむいて額髪をぬらして居た。乳母などはその声をきくと一所にふるえた声で、

「何と云う方だろう、何と云う方だろう」

と云つて西の対をにらんで居た。熱はなかなか下らないでうわごと許り云つて居るので母君は心配して、

「この里の東の海辺の家は大変景色がよいそうだから

そこへ行くようにすすめてお呉れ」

と云つてよこしたので乳母は、

「『この里の東の海辺の家は大変よい景色だそうだから行つて見

たら』と西の対から云っておよこしになりましたから行つて御覧になりませんか」

と云つてすすめると光君は青ざめて凄いまで美しくしさのました顔を上げて、

「そんなむごい事は云わないでお呉れ。どうせ死ぬ命ならせめてあの人の居る家で死にたいのだから。私はどんなにそれをのぞんで居るだろう」

と云つて目を閉じて涙を流して居るので、

「じょうだんにもそんな事をおつしやつてはいけません。どうぞ貴方の御身御案じ申し上げて居る多数の家の人のためにとお思になつていらつしやつて下さいませ、キット私はあとから彼の方も

すすめてあちらの家にあげる様にいたしますから」

と二日も四日もかかつてすすめたので、

「それではキットそうしてお呉れ私は行きたくもないところへそれ許りをたのしみにして行くのだ。若し約束が違えば目を開いて二度お前の顔を見ることはないだろう。じょうだんだと思つてきいてお呉れでない」

とさんざん物悲しい事をならべたあげくとうとう行くことに返事されたのでにわかにな所に行く供人をえらんだり何かにか用意するのに一週間許りは夢のように立っていよいよその日になった。美しく化粧した光君の姿が車の中に入った時あとにのこる女達は急になさけない気持に、

「お大切に遊ばす様に」

「あんまり御歎きにならない様に」

「ここに残つて御身の上を御案じ申しあげて居るものを御忘れなく」

などと云うことばは車のそばに来て見送りをして居る女達の口から出たことである。女達は衣の裾が汚れるのも忘れて立つて居る。

「ここに居てなまじ悲しい思いをするよりは」

などと袖で顔を覆うて挨拶もしないでかけ込んでしまふ人達もあった。旅をしなければ女達は彼の世にでも行くように思つて歌をやつたりとつたり笑つたり泣いたりして居る。車簾の中からそのそわそわした様子を見て居た光君は自分の事でないように落つい

た心持であの家に行つてからの楽しさを思つて居た。

「さあもういいでしょう。夜中まで歩かなくてはならない様になると上様の御体にさわれますから」

と徒歩で行く男達は口先では急ぎ立てては居るが自分達許りの都を只の一月でも半年でもはなれると云うのが悲しいようであんなり大きな声は出せなかった。

車の動き出したのは日の高く上つた時である。

一番先に徒歩の男、まん中に光君の車、車簾の間から美しい五衣を蝶のまうように見せた女達の車、衣裳道具をのせた車はそのあとから美しくいしずかな行列であつた。路の両かわに立つて見て居た里の女達は女達の乗つて居る車を見て、

「マア、何と云う御美くしい事だろう。マア、あの衣の色の好い事と云つたら、どんなに美くしい方達が乗つていらつしやるんだろう」

などと話し合つて居る。しずかな足音に交つてかるいやさしい調子の話声がきこえたりゆれる毎に美くしい香を送つて来ることなどは京に出たがつて居る若い女の心をそそるに十分であつた。

供の男がならんで歩いて居る男に、

「ホラ御覧、あの柳のかげに居る女を、今一寸見た時は一寸悪くないと思つたが女の人達の車が通つた時衣のはじをのぞいた顔を見たらうんざりしてしまつた」

「それは御愁しようさまなことで、よくねて居る時と、ねばつく

ものをたべて居る時と自分より背の高い人の背越しに物を見て居る時のかおの好い女はほんとうに好い女だと私の長年の経験ではそう思つて間違ひはない」

などと下らない事を云つて強いて笑つて居るような声をきくにつけても自分のまわりにはそんな事を云うことほかしらないもの許りになつたのだと急に淋しさが身にしみて来たけれ共景色の好い風情のある住居に気の合つた人達許りで住んで紫の君も自分のものとなつて朝夕あのかがよく様な美しくい顔を見て彼の人の衣のうつり香に自分の身まで香わして居る時はマアどんなに楽しい事だろう。そんな時には却つて淋しいほどのところがいいそうでもあるからなどと夢の様のはかないたのしさを思いながらゆられて

居た。

女車の中の人達も、久々で野辺の景色や、里の女達に賞められたりうらやまれたりするので祭りに出た時のような気持になつてうれしさにまぎれて居たが段々日影も斜になつて来るしあう人もまれになると淋しさが身にしみて高く話して居た声もいつかしまつてはばかりる人もないのに御互に身をよせ合つて何か話し合つては※ぶ声が車の外まできこえるので男達までのこして来た妻の事などを思い出して足の運びのおそくなるのを年取つた旅なれた男がいろいろに世話をやいて力をつけるのであつた。光君は始終紫の君の事を思つて居るので退屈はしないかわり時々溜息をついたり涙を流したりして居た。目的の町に入つた時はもう日の落ちか

ける時であつた。町に入つたと云うのをきいた女達は急に顔をな
おしたり着物をととのえたりして今までの事は忘れた様に美しく
い声で話し合つてはかるいさざめきを車のそとももらして居た。
男達も同じ事である。夕焼けのかがやきと相まつてより以上に美
くしく見える女達の衣の色は前よりも一層はげしく賞め言葉を受
けた。海辺の家についた時はもうすっかり日が落ちて居た。

(七)

今まで見たこともない様な大きな波の朝夕寄せたり引いたりし
て居る海辺のわびしい住居に昨日落ついた許りの光君やその他の

ものは世の中が變つた様な別世界に來た様な氣持で居る。歌と絵にほか見もしききもしなかつた藻塩やく煙も朝夕軒の先に棚引いて居ては歌によむほどなつかしいものでもなかつたし毎日藻塩木をひろいに来る海士の女も絵のように脛の白い黒い髪のかなやかな風をしたものは一人もなかつた。ここの生活は空想と現實の差をしみじみと人々に思わせるのであつた。

さっぱりと美しく出来ては居てもまだ木の香も新らしくてなつかしい部屋の主のうつり香もなく見覺をつける様にして家の中も歩いて居る位なので若い女達や小さい童などは夜になると各々の部屋に引き込んで呼ばれなければ出ない様にして居た。光君は目の前に海の見える浅い部屋で暮して居た。前栽は自然のままを

とつたので大きな苔のむした岩や磯馴の面白い形をした松などが入れられて引水も塩水を引き込んであるので泉水の中には水の流れにつり込まれて赤い小さい魚などが出るのを忘れていつまでも居ると、そんな様なかん単の調子で暮して居たけれ共そこに住む人の心はそんなかんたんなものではなかった。一目見た時に、「マア何と云う淋しい所だろう。私はこんなところに一日も居られないだろう」

と云つて居られた光君が一日立つと誰よりも此の家が好きになつて女達を集めては、

「アノマアまっさおにはてしなく続いて居る海を御覧、何と云う大きな美しくしさだろう。それから此の真白い銀の様な砂を御覧、

その間に光って居る赤い貝や青い石をアアほんとうに私はその美くしい貝や石をつないで彼の人の体いっばいにかざって上げたい。彼の人が早く来れば好い」

などと何かにつけて紫の君の事を云い暮して居た。一日立つても二日立つても女君は来ないのでイライラした光君はわきに居る乳母にいきなり、

「返事は何と云って来た」

と云うと何の事やら分らないでマゴマゴしながら、

「返事、何の返事でございます。お文でもお上げになったのでございませうか、私は一向存じませんが」

と云うと斜に座って居た光君はクルリと向きなおってけわしいか

おをして、

「私はもう今すぐここを出て山の家に行つて仕舞うから好い、すぐ仕度をたのんでおくれ。私はお前にだまされるとは思わなかつた」

と云つてジツと顔を見つめて居るので乳母はウツカリ口をきいてはとだまつて頭を下げたがやがて思いだしたように、

「分りました。年をとつたのでついどう忘れをしてしまつて。私
が来る時にくれぐれもたのんで彼の方の乳母はどんなにもしてよ
こす様にするからとうけ合つたのでございますからもう二三日し
たら行らつしやるに違いありませんですから」

と云うので、

「それなら好いけれ共どうぞ私の心も少しは察してお呉れ。こんなたよりない心をどうせ察しは出来まいけれ共」

などとそれから乳母を相手にいろいろな悲しい事を云つて沈みきつて居た。夜になつても寝られなかつた光君は当直の女の中で一番若い京の人の母親をもつて居てこつちで生れた紅と云う女を呼んで自分はあかりの方に背を向けて真白に人形のように美しい女のかおをしげしげと見ながら、

「ネーお前どうぞ私のきくことに返事をしてお呉れナ」

とやさしい声で云われると女はうつむいて少し頬を赤くしながら、
「私に分りますことなら」と云う。光君は、

「それではきく、どうぞ正直に教えてお呉れ、思い上った心強い

女を恋して自分のものにしようとしてとめる男と、男の命をとるまでに心強い女とお前はどっちが悪いと思う」

と云うのは自分と紫の君の事を云うのだと女にはよく分つて居るので何と答えてよいかと思い迷つてだまつたまんま袴のひもをいじつて居ると光君は涙声で、

「お前は女だから女の味方をして『それは恋する男の方が悪いのだ』と思いながら口には出しかねてだまつて居るんじゃないかい」

女は其れには答えないで、

「私はお察し申して居ります。私は貴方が悪いとは決して思つて居りませんけれども紫の君もお心のたしかなたのもしい方だと

この頃になって余計に思う様になりました」

光君はよろこびにはずんだ様な声で、

「お前もそう思いかい、どう云うわけで」

「申し上げましょう。けれ共女のあさい考えで若し間違えて居りましたらどうぞ御許し遊ばして。」

私は此の頃の姫様方があんまり音なしすぎて何でも云うことを御ききになりすぎるのをいやに思つて居ります。それにあの方許りはしつかりときまつた御心でいらつしやいます。御自分には御両親がないから今にも少し立ったら黒い衣でも着ようと思つて居らつしやいますし又、御自分は人の家にかかり人になつていらつしやる方でございますからその自分のために関係の多い方に苦勞

をかけたなり又、そうたいした後見の方もない自分にかかり合つて居らつしやる方だなどと云わせたりしてはすまないと云う御心なうでございますつてよく乳母の人が云つて居ることとでございます。私はよけい御いといい、たのもしい方だと思つて居ります」
と云うと弟君も大層よろこんで、

「御前は若いからよく私の心も察して呉れる。彼の人々の心はたのもしいとは思つてもつれない様子は恨まれる、若しお前が彼の人だつたらどうする」

と云うと女は夜目にも分るほど赤いかおをして、

「存じません」

と云つてわきを向いてしまふ。

「あんまり下らない事を云つて仕舞つたゆるして御呉れ」

と云つた光君は心の中で自分よりもつとはかない恋をした人が世の中にまたと有ろうかと思ひながら、

「お前は私よりはかない恋をした人の話を知つて居るかえ」

ときくと女は口ごもりながら、

「絵の中の人に恋した話や、夢に見た面影の忘れられなかつた人などは世の中に多いときいたことがございます」

と云つてそつと若君のかおを見ると淋しい悲しそうな面持で、

「恋する人の心はこんなに悲しいものだろうか。私は紫の君に合うことをよろこびながら恐れて居る」

そう云つたまんま光君は静に目をつぶつて居て身動きもしない

ので女はもうお寝になったのかとそうと立とうとすると、

「もう行ってしまうの、もうねむくなつたのかえ」

と思いがけなく若君が云つたので女は中腰になりながら、

「イイエ、左様じゃあございません一寸」

と云つてまた座りなおした。女も光君もだまつたままややしばらく立つたが、

「もう行つても好い。そのかわり呼んだら来て御呉れ」

と云うので女は次の間に立つた。光君はその夜一晚中イライラした何か強い刺げきを望む様な心持で夜をあかしてしまつた。若君には紫の君も立派な御心だし、貴方の御悶えになるのも無理はないと云つた女の答がこの上なくうれしく思われて居た。

(八)

家の宝の様に思つて居る美しい人達を送り出した山の手の家では火の消えた様に急にヒツソリして噂はいつも海辺の家に行つた人達の上にかかつて居た。東の対の光君の部屋では残つた女達がひまな体をもてあましたようにいつもより倍も念入りに化粧してあつちに一かたまりこつちに一かたまりと集つて海に行つた人の噂をして居る。

「私はあの海辺に行つた人達がうらやましくて、あんなに美しい景色のところで美しくい方と一所に暮して居たら、マア、どん

なにたのしい事だろうと思うとネ」

髪の短い女が云うと、

「私は行かなくてよかったと思ってますの、なぜって云えば、
『人里には遠く前にははてしなく大海原がつづいて夜になれば松
風の音許りになってしまふ、風のひどい時は枕元まで浪が来る様
で』

とこの間の文にありましたもの」

と云う女はおとなしそうなあんまり小才のききそうもない女である。

ひまな女達はあけくれ人の品定めや化粧のしかたの工夫やらで
日を暮して居る。西の対の紫の君の部屋では急に母君のところか

ら「海辺の見はらしのよい家が出来たから少し気散じに行つていらつしやい」

と云われたので女達は大きわぎをして居る。乳母は女君がいやだと云つて大変こまるので、

「ネー、モシ、貴女はどう御思になりますか。私はきつと光君があんまり何なので少しの間ほとぼりをさますようにとお思ひになつてなののことだろうと思ひますから御出で遊ばした方がようございますよ」と云つたので、

初めは首を横にふつて居た女君もそれではとうなずいたので急に仕度にとりかかつていよいよいつでも出られると云う様にそろつたのは四日の後であつた。

五日目の日、日柄も好しお天気も定まったからと云うのでいよいよ出ることになった。仰山な別れの言葉などをかわして車に乗った女達は尚残りおしげに時々車簾を上げては段々小さくなつて行く館を見て居た、やがてそれも見えなくなつた時には急につまみ出された様な気持で誰も話もしないので一人一人違つた思を持つて居た。しずかなあたりの景色や人の足音にいろいろの思の湧く女君は懷硯を出して三つ折の紙に歌や短い文などを細く書きつけて居た。女達もまねをするように紙を出したり筆をしめしたりして居たけれ共あんまり才のない女達は車のゆれる毎に心が動いてとうていものにならないのであきてしまつて筆を持ちながら髪をさわつて見たり、思い出した人の名を片っぱしから書きつけな

どして居たので女君が、

「どんなのが出来たの、見せて御覧」

と云った時に、

「出来ませんけれ共」

と云いながら紙を出した女はたった一人か二人ほかなかった。

女達はしずかにおだやかな旅をつづけて海辺の家についた。

女君は海辺の家に行つてから二日立つまで弟君の居ることを知らなかった。

部屋も大變はなれて居るし女達もだまつて居たのでしずかにして居る女君には一寸もわからなかったのである。

二日目の夕方、女君は縁側に出てしずかな夕暮の空気の中に灰

色によせては返して居る波音をいかにもおごそかな心持を以てきいて居られた。段々波の底まで引き込まれる様な重い気分になつて早く他界した二親の事から、この頃の事などを思い合わせて段々迫つて来る夜の色の様に女房の心には悲しみが迫つて来た。ジ―ツと海を見つめて居ると目にうつる万のものがくもつて来た、冷たいものが頬を流れた。女君はたえられない様にうつぷせになつてしまわれた。傍の木かげで男君が見て居様などとは夢にも思わなかつた姫ははばかり人もなく心のままに悲しむことの出来るのを悲しい中にもよろこんで居られた。まだ木の香の新らしい縁に柳の五重を着て長い美しい髪をふるわせながら橘の香の中につかつて居らっしゃる女君の姿は絵よりも尚多いものであつた。

始はつつましく声を立てなかつた紫の君も心の中にあまる悲しみは口の外に細い細いすすりなきの声となつてもれた。わきに見て居る男君はたえられなくなつてかくれて居るのも忘れて、

「才才美しい、まるで絵の様な、私はその涙を私のためにそそいで下さる様にとだけねがつて居るかは貴女も知つて居らつしやるだろうに」

とうらめしい様に云いながらそのそばによると、思いがけなく声をかけられしかもそれが光君だと云うことを知つた女君はにげるにも逃げられず声を立てるにもたてられず前より以上に深くつつぷしてしまわれる美しくしさはなおます許りで夕暮のさびた色の中に五色の光を放つかの様に見えた。男君は女君の大きな衣の下か

ら細工物の様な手をさぐり出してそつとこわれない様にと云うふうに握りながら、

「何故そんなになさるの、私はどんなに貴女のそのかがやく様なおを扇なしで見たいと思つて居たことでしょう、ネ、どうぞこつちを向いて下さい」

女君のすき通る様に白い耳たぼはポーと紅さしてとられた手を放そうともしないで只小さくふるえていらつしやる様子に光君は、「どうしたら好いだろう、こんなに可愛い人を」とまで思いながら自分も小さいふるえた声で、

「私は何からさきに云つてよいやらわからない。私はほんとうにもう死んでも好い、貴女のおを扇なしで見たから、貴女は自分

のために命をなげうってまで辛い恋をして居る男を哀れとお思いにならないの工」

女君は恐れる様に身をふるわせて居る。

「そんなに貴女は私を恐れてそんなにいやがつていらつしやるの、私はマア——そんな人間になつたのだろうか。私は、それなのに、それなのに私はどうしても貴女のことを忘られない、心をこめた錦木も童のおもちやにされるほどだのに」

「……………」

「何とも云つて下さらない、どうぞ何とか云つて下さい、『馬鹿者』とでも『おろか物』とでも。私は気が狂いそうだ、私の心はどうしても貴女に通じない、サ、どうぞ何とか云つて下さい」

若君の声ははずんで絶々に女君の耳にささやかれる。女君のかおは青ざめてふるえもいつか止まって小鬢の毛一本もゆれて居ない。口は封じられた様にかたとぎされて人形の様になった女君に、気のぼうとなつて体の熱さばかりのまして行く男君は尚熱心に云う。

「貴女は知つて居らつしやるでしょう、恋しい人の門に立てる錦木の千束にあまつても女の心が動かない時には男はいつでも苦しい悲しい思をのがれるためにまだ末長い命をちぢめると云うことを。私の立てた錦木はもう千束にとうにあまつて居ます、それなのに貴女は、貴女は」

女君の目からは涙が流れた。恐れてでも、若者の心を察してで

もなかった。女君の心はこんなことを云われる自分はどこかたりないところがあるからだと言ふ思でみちみちて居た。涙は口惜しい意味の涙であつた。

「涙！ 誰への涙何が悲しくつて。

貴女は私が貴女の二親のないので馬鹿にした恋を仕掛けて居ると思つて居らつしやるのではないの、そうじやあないの。私の此の命にかえてまでの恋は貴女にはそんなに思われているのか知ら、そんなにまで下らないものに思われて居るのか知ら、それほどまで」

男君の頬には涙が流れた。

「私はもう何も云いますまい、けれどどうぞこれだけは返事をし

て下さい。貴女の私にこんなにつれなくするのは御自分の心からの、それとも人に教えられて、どうぞ教えて下さい」

女君はだまつて居る。

「何故返事して下さらない、貴女の心から、それとも」

女君の唇はまだ動かない。

「貴女の心から、それとも教えられて」

若君の心はふるえにふるえおののきにおののいて居る。

「心から」

低いながらもハッキリした声は人形のような女君の口からもれた。

男君の顔の筋肉は一時は非常にきんちようしそして又ゆるんだ、

と同時に、

「貴女の心から心から、貴女の、おお貴女の心から、どうぞどうぞ貴女のその口から死ねと云つて下さい、死ねと……云つて下さい。私のこの真心はあなたの心の中に皆悪い形に變つてうつつて居た、もう二度と貴女に会いますまい、けれ共死んでも貴女を忘れませんよ、死んでも忘れませんよ、それだけは覚えて居て下さい。おお、氷の様な美しさの方、忘れない方、紫の君」

光君のかおは死んだ様に青ざめて息はずみ声はうわずつてあらぬかたを見つめ、もえる様な言葉はふるえる唇からもれる。だまつて毛を一つゆるがせなかつた女君はソーと立ち上つた。一足一足段々遠くなるけれ共、若君はまだよそを見つめて居る。女君の姿はも少しで物かげにかくれようとしたその時急に夢からさめ

た様に、しなやかにうなだれて行く女君の後姿を見て居たが両手でしっかり胸を抱いて、

「おお、あの姿——」

つつぷしてかたまつた様になつた男君の姿は、淋しい潮なりと夕暮のつめたい色につつまれながらいつまでもそこを動かなかつた。

(九)

その後一日二日と立つにつれて光君の頬のやつれは目立って来た。前の様に苦情も云わず悲しいことも云わないでだまつたまま

でだんだん衰えて行く若君の様子を心配しないものとしては家の中に庭の立木位のものであつた。

「どう遊ばしたのでしよう又御悪いのか知ら」

「よく伺つてお祈りをしてもらうかお薬を差し上げるかしなくては大變な事になるかも知れませんヨ」

などと云う不安心な言葉はよるとさわると女達の口からもれた、乳母は日に何度となく、

「どうぞおつしやつて下さいませ、私の命にかえてもと思つて居る君様がこんなでいらつしやつては——少しは私の苦勞や悲しみをお察し下さいませ」

と涙を流して拝む様にしてたずねても只、

「何ともない、時候の変り目で着衣もうすくなつたし、又私のいつもの夏やせだから心配しないで御呉れ」

と云う許りで日許り立つて行つた。山の手の家から時々来る使はいつも必ず母君と常盤の君の手紙を持って来るのであつた。三日目の今日来た男は例の手紙を取り次の女に渡しながら、

「お前さんはここに居る事だから知りなさるまいがこの頃常盤の君はお腹の工合が変でネ、そのこんど生れるヤヤサマ嬰兒をおつつけられると困るのであの御兄弟もこのごろはいたちの道切りと云うわけなので、おつつける人を今から一生懸命にあさつておいでになると云うことだ、いやはや恐ろしいことだ、桑原桑原」

と云つて居るのが部屋が浅いので光君の耳まできこえた。持つて

来た手紙はいつもの様にいや味たつぷりなものであった。光君はそれをポイとわきになげて再び見ようとは一寸も思われなかった。この間の夕にあの美しい女君の口から、

「心から」

と云う言葉をきいてから光君は悲しみのあまり驚きのあまり、この頃は魂のぬけた様に何を考えて云おうとしても思は満ち満ちて居ながら順序を立てて言葉に云うことは出来ないほどになつてしまった、それで居て、

「心から」

と云つた其の声と姿の忘られないのをどんなに若君は悲しがつたろう。七日、十日と立つと氣の狂う許りにたかぶつた神経も段々

しずまると一所に前よりもはげしい悲しみが光君をおそつて来た。明けても暮れても光君の耳には、「心から心から」とささやかれて居た。或時女達に向つてきいた。

「つらいこの上なく辛い思いをして生きて居ると死んで仕舞うのとどっちが好いだろう」

女達はお互に顔を見合せながら、

「私は最後に少しでも望みがあれば生きて居りますが、それでなくては死んでしまいます」

と答えた女が多かった。

「誰でもそうだねー、私が今急に死んだらお前達はどうするだろう、お墓の中からのぞいて居たら面白いだろう」

とじようだんの様に云った光君の言葉をきいた女達は心の中で、
こんなにやつれていらつしやるのだから何とも云われないとたよ
りなく思いながら、

「そうしたら女達はみんな黒い着物を着て髪を下してしまいます
でしょう」

と年かきの女は答えた。

「お前方のなつた尼さんは黒い着物の下に赤の小袿をかくして髪
を巻き込んでおく位のものだろう。私が死んでしまった時にほん
とうの真心から黒い着物を着て呉れる人はこの広い世界に一人も
居ないのだ」

そんな事を話した夜から光君は大変熱が上った。うわごとは絶

えまなくもれた、その思つて居ることを正直に云ううわごとは一言でも半言でも皆紫の君のつれなさを嘆いて居るのであつた。乳母は悲しみと怒りにふるえながら、

「まだ彼の人は意地をはつていらつしやると見える。何と云うにくらいの方だろう、きつと化性のものにちがいない」

とまで罵つた。子供の様にたえられない様にすすり泣きをすることもあれば、いかにもうれしげに肩をすぼめて笑うこともある。女達はきつと光君はもうもとの心にはかえるまいと思つてどんなに悲しがつただろう。うわごとを云つて熱の高かつた日は三日だけであつた。四日目に熱はうそのように下つて夢からさめた様に青ざめてつかれはてたように乳母によりながら、

「何と云う因果な事だろう、私はあの人に、『心から貴方につれなくする』とまで云われても、私はあの人の方が忘れない。お願いだ、どうぞ忘れさせて御呉れ、あの氣高い姿とあのがやく様な顔を」

と云つて三つ子の様に乳母の肩にかおをうずめて泣いて居る。乳母はもう胸が一杯になつて何と云つてよいやらわけがわからず只その背をさすつて、

「お察し申します、お察し申します。私ももう死んでしまいそうに悲しゅうございます」

と一所になつて泣いて居る。

「何故私は忘れないのだろう、彼の人はなぜするどい剣で私を

殺して呉れないのだろう、何故殺して呉れないのだろう。誰もなぐさめても呉れず、只一人で泣いて悶えて苦しんでそうしてたつた一人で死んで行くのが私の運命なんだ」

ひからびた様になった年とつた乳母の肩をしっかり抱いて泣いて、身をふるわせて悲しい思をうったえて居る光君の哀れな様子に女達は居たたまれなくなつて顔をおさえながら出て行つてしまつた。その□もう一度もうわごとを云う様なことはなかつたけれども共悲しさはますますひどくなりまさつて行く許りであつた、かくして居ようと思つた乳母も、心配で心配でたまらなくなつたのでとうとう山の手の家に知らせた。母君などはもうとつくに紫の君はなびいて居て帰つたらすぐ御婚礼の式が出来るのだろうと思つ

て居たので驚き様は一通りのものではなかった。その日の内に返事が来た、それは何はともあれ早速こっちの家につれて来る様にと云うのであった。乳母は早速男君にかえる様にとすすめた。光君はだまつて頭を横に振つて居た。乳母は幾度も幾度も口をすすしてすすめると、

「私はどんなことがあつてもこの家は動かない。私は死ぬ時にはあそこの此の上なく悲しくこの上なくなさけない思出をのこした椽に臥れて死ぬのだ、私は早くその時の来ることをねがつて居る」これだけ云つたきりあと幾度すすめても幾度さとしても同じであつた。乳母はしかたなしにそのことを山の手の家に云つてやつた。母君は「それでは氣の向いた時に帰る様に」と云つて来たの

で少し安心して光君が自分から帰ろうと云い出す日を待つて居た。その月も末になった頃、女君が山の手の家に帰ったと云うのをきいて急に里心のついた光君はその翌日すぐ車を仕立ててあわてた様に山の手の家に帰って仕舞われた。一時に美くしい二人の主を失った家は元の様にあけても暮れても戸は占められて留守の老夫婦がその大きな家の主であつた。

(十)

山の手の家に帰った光君は氣抜けのした様にだまって人に顔を見られるのをいとして居た。たびたび西の対の母君のところから

見舞の手紙が来ても見たきりで三度に一度ほか返事はしなかった。紅や乳母以外の人には一言も身の淋しさや悲しさを云わなかった。時々女達には、

「彼の人はどうして居るのだろう、私は心配で仕ようがない」

などと云う位のものであつたので女達はもうきつと御あきらめになつたのだらう位に云い合つて居たけれども中々それどころのさわぎではなかつた。光君はどうせ沢山の人に云つたところで自分の満足する様になぐさめて呉れるではなし又それについて身分相当に力をつくして呉れると云うのでもないから甲斐のない事だと思つて居られるので、胸ははりさける様になつても乳母だけにほか心の中は打ち合ける事をしなかつた。思いに思い考えに考え抜

いて我慢の出来ない様になった弟君は、

「どうぞあの人の部屋につれて行ってお呉れ、只あの人の部屋に行つた丈で満足するのだから」

と云われたが乳母はどうしたものかと考え込んで一寸には返事をしないで居ると、

「それもいやなのか、御前は思つたよりたよりにならない人だつた。私はけつして彼の人を苦しめる様なことはしない、私はあの人を死ぬほど思つてるんじゃないか」

乳母はまだだまつて居る。

「お前はまだまだまつて居るの力エ。私は自分の命のもう長くない事を知つて居る、思い出にどうせ死ぬ命ならと望んで居るのにそ

れさえお前は許して呉れないのか、私は自分の生の母よりも御前をたよりにして居るのに」

光君の目には涙が出て唇はかすかにふるえて居る。

「私はあの方の乳母に対してあの御方の部屋に御つれ申すことは出来ませんが、道導べに柱に赤い糸を結びつけて置きますからそれをたよって御出になれる様にいたして置きましょう」

乳母はようやくと答えた。

「それでは夕方から行こう」

弟君は嬉しそうに目を輝して居る。フツクリと形よく肥えていつもさくら色した頬や、若々しく輝く両の瞳が生れつき形の好いかお立ちをたすけてその美しくしきは若々しい力のこもったもので

あつたのが、この頃は頬は青くこけて瞳は怪しい曇りを帯びてにごつて香う様な鬢の毛許りがますますその色をまして居る、物凄いい、さむい様な美しくしさである。

光君は、朝夕鏡を見る毎に日ましにつやをます鬢の毛、日ましにこけて行く両の頬を見て淋しい微笑をうかべて居た、その衰えてますます美しくしさのました体をかかえて光君はどんなに日影の斜くのを待ちあぐんで居ただろう。ボンヤリと脇息によつてあてもないところを見つめながら小さい吐息をついて自分の不幸な身の上を思つて居られた、その様子を見た女達はこんなにお美しい方をどんな方でもいやに思いになるはずはないのに彼の方はほんとうに妙な御方と云い合つて居た。夕方になつた、待ちあ

ぐんだ光君は幾日ぶりにその身を部屋のそとに見せた。光君は長い廊を角々の柱に結びつけた赤の糸をたよりにたどって行かれた。道しるべの紅の細糸は親切に光君を迷わすことなく紫の君の部屋の前まで導いて来た。その人の部屋の前に立った時、光君は今更の様に胸をとどろかせてぬり骨の美しい明障子の立った様子を見た、何の音もなくしずかな部屋の中には時々柔い衣ずれの音がきこえたりかるいさざめきがもれたりして居た。白い手はかすかにふるえながら障子に掛った、細目にソーと引いて中をのぞくと美しい几帳が沢山立ててあつてそのわきから美しい色の衣の端がチラチラとのぞいて居る。光君の心は浦島子が玉手箱を開ける時の様に震えた、彼の衣のどれが彼の人だろう、とすぐに

入つてその人のかおを見たい様にも思つたけれ共中はまだ燈火も
つかず、人のかおもハッキリ見える明るさである。小胆の光君は
思い切つて中に身を入れる事は出来なかつた。せめて燈火の灯つ
てからとソーと障子をたてて誰か自分を見ようとして居なかつた
かとかるい恐を持ちながらその前の階から葉桜のしげる庭へ下り
た。夕暮のしめつた色は木の葉の間々庭草の間々からわいて種々
の思いを持った人の身のまわりを包む、光君は頭を深くたれてい
かにも考えあまつた様にだんだん冷たく暗くなりまさる庭を歩き
まわつた。いろいろの思はずかな空氣と結び合つてわき出る様
に歌になつた。その美しい立派な歌は惜し気もなく光君の口か
らもれて桜の梢に消えて行く、沢山の歌が空に飛んだ時対いの屋

にポツと一つ生絹の障子をぼかして燈火がついた。光君の眼は嬉しにかがやいた、歌の声を止めて一つ一つふえて行く燈火の光を見つめて居た。自分の目ざす部屋には中々燈火の光が見えなかった。

「マア何と云う察しのない事だろう、私は彼の人の部屋には一番先に燈火の光が見える様にと祈つて居るのに彼の可愛ゆらしい童も私の心は知らない」

誰にもはばからず云った一人ごとくも歌声と同じように桜の梢に消えた。小供の様に待ち遠しがる光君は目でも瞑つて居たら一寸でも早くなつた様に感じるかも知れないと、かるく目をつぶつてうす墨でぼかした様に立つて居る桜の梢に身をよせた。廊を歩る

くかるい足音や小さい童の女達にからかわれて高い声を出してか
けて行く音などがともすれば流れ出しそうになる光君の涙を止め
て居た。時々そうと目を開いて彼の人の部屋の障子を見たけれ共
なかなかつかしい様な燈火のかげは見えなかった、その度に光
君の悲しさはまして行つた。三度目に目を開いた時美くしい灯か
げは障子を美しくそめて居た、光君は嬉しさに満ち満ちた身を
おこして元降りた階を昇つた。そして又もとの様にそうつと明障
子を引いて見た。沢山の女達は湯殿に行つたと見えて二三人の女
が居るらしいなつかしい衣のうつり香と白粉のかおりと衣ずれの
音は仄赤い灯の色と交つて魂の遠くなる様に光君の身のまわり心
のまわりを包んだ、戸をあけた人はまだ思い切つて几帳の中に入

ることは出来なかった。いきなりサヤサヤと云うかるい衣ずれが耳のきわでひびいた、夢中でつと身を引いた光君は障子をしめてそとに立つて居た。

「夜になつてから」

光君はそう思つて光君は西の対へ自分の部屋に歩をうつした、歩きながら、

「こんなに思つて居ながら自分は何故彼の人の部屋に入り込むことが出来ないのだろう」

と不思議にふがない様に思いながら自分の部屋の戸を開けた。そこには乳母と女達が四五人丸くなつて世間話をして居た。いきなり光君が入つて来たので女達はきゆうにバッと開いて、

「マアどう遊ばしたのでございますか」

「彼の方はどう遊ばしました」

と云う言葉はつづけ様に女達の口から出た。光君は恥しそうに、
「私は——笑っておくれでない、私は何んだか恐ろしい様で中に入れなかった、夜になってからでも行こう」

と云つてくりと身をかえして几帳のかげにかくれてしまわれた。
女達は目を見合わせながら、

「まアなんと云う幼心な御方なんでしょう、お可愛いこと」
などと云い合つて居た。夜になった、光君はそうと几帳のかげから出て、

「又行つて来る、また只かえつて来るかも知れない、私見たいな

おく病ものは又とないだろうネー」

などとかるい口振で云つて微笑を浮べながら出て行つた。後を見送つた女達は、

「今日はまア何と云う好い元気で居らつしやるんでしよう、いつもこんなでいらつしやるといいんですけれ共ネー」

「ほんとうにですよ、今度いらつしやつて又無情つれなくされていらつしやると又どんなにお歎きになるかそれを思うと私はたとえ様もないほど悲しいんです」

と乳母などは云つて居た。

光君は障子の前に立つた。ソーと引いて思いきつた様に身を入

れて几帳の中へ身を入れた。女君は後向になつて机によつて何か余念なく書いて居る。手のうごく度に美くしい衣ずれの音のなつかしいうつり香を送る。光君はとどろく胸を幾重もの衣につつんでしのび足に紫の君の後に近づいた。そしてソーとそのすぐうしろに立つた、まわりに一人も女が居ない。男君は女君は自分の居るのを知らないのだと思つて居た、けれ共からだのすみずみまで鋭い神経の行きわたつて居る女君はその高い衣の香と衣ずれの音とで光君の後に居ることは知つて居たけれ共、知らないように髪一条もうごかさなかつたことは恋に盲いたようになった光君にはわからなかつた。光君はソーと女君のわきに座つた。女君はまだ下を見たまま手を動かして居る。男君はおちつききつた女君の様

子におどろきと悲しみを一時に感じながら、

「紫の君、私をお忘れにならないでしょう、どうぞその顔を上げて下さい」

女君の手はまだ動いて目はまだ下を見て居る。

「私はあなたに『心から』とまで云われました。それでもそれでも私は忘れなくて、忘れなくて、しようりもなく又来たんです、こりのないいくじのない男だと貴女は思つて居らっしゃるでしょう、けれ共、恋する男の因果ですもの」

女君の手はとまって目は油断ないようにかがやいて居る。

「貴女はまただまって居らっしゃる、だれがその美しい唇を封じた様にしました、誰が貴方、何故そんなに無情なくなさるの。」

私は今なこうにも涙はかれ悲しもうにも心が乱れて私はもう死ぬばかりになったんです、今、私は死ぬ事をどんなによろこんで居ましょう、私はよろこんでるんです、貴女のために死ぬことを」

涙を一杯ためて心のままを女君に云った光君は恐れる様に机の上に出た女君の手をとろうとした。だまってしずかに人形のようにして居た女君は光君の手をふりはなすと一時に卯の花の栢をスルリとぬいで生絹のまま袴を歩みしだいて唐びつの間をすりぬけて几帳のかげに見えなくなってしまう。取りのこされて氣の遠くなつた様にその行末を見まもつて青ざめてふるえて居る男君はどんなに悲しかったのだろう。

「私の最後の望も絶えた、私の死ぬ時が来た、もう彼の人を再び

見る時はないだろう」

主のない文机にぬけがらの様になつた体をよせると目の前には
 白いかみに美しく手習がされてわきには歌も沢山綴じられて居
 る、それをじーと見て居た光君の目からは今更の様に涙が止度も
 なく流れ出した。涙にぬれたかおを白い紙の上にふせて氣の遠く
 なるほど泣いて泣いて泣きぬいた男君は、

「こんなにないても自分の涙の泉はなぜかれてしまわないだろう」
 と不思議に思われた。

心は段々と落ついて来た。それと一所に泣くよりも強い悲しみが
 胸をおそつて来た。もう涙も出ない、光君の心は悲しみのかた
 まりになつてしまった。

「私はもう二度とこの部屋に来ることはないだろう」

「才才なつかしいこの文机、なつかしいこの衣こう、左様なら、若しお前に心があるならそう云つて御呉れ、『私は彼の人のうつり香のする部屋で死にたいけれ共それはどうせゆるして下さるまい。私はこの貴女の残して行つた衣を貴女と思つて抱いて死ぬ、せめての心やりに』とね。そう云つて居たと云つて御呉れ、さらば——とこしえに」

若者の姿は障子のそとにきえて机の前の女君の衣もなかった。

(十一)

随分歩いた、随分久しい間歩きつづけた。それでもまだ光君の部屋へはつかない。それに路は大変ひどくて急な坂や、深い淵がある。光君は急な流の水に女君の衣の裾をぬらすまいとし、多く出た木の枝では美しい衣にほころびを作らない様にして歩いた。大変つかれてもう歩くことが出来ない程に思われた、下は大変にかたい岩であるけれども我慢が出来なくてその岩の上に腰を下ろした。大変につめたいのでビツクリするといっしょに光君の心は夢からさめた様にハッキリした、妙だと思つてあたりを見ると深い山でも恐ろしい川辺でもない、自分は西の対の廊に腰を下ろして居る。女君の衣を持つて居たのも幻かと見れば夜の中に卯の花の衣は香つて居る、これは幻ではなかった。男君の心は乱れてど

れがほんとうでどれがまぼろしとも分目がつかなくなってしまう。考えるでもなく涙をこぼすでもなくボンヤリと木の間にチラチラと見える灯の光を見て居た。遠くの方から足音が段々近づいて来る、そしてパタツと光君のわきで止った、そしてそつとすかし見る様にして、

「オヤ、マア、誰かと思ったら貴方だったのか、私はまた物ものの化でもあるかと思つた。私はこれから常盤の君の部屋に行くから貴方もおつき合いをなさいよ」
と云う声は兄君である。

「エエ」

気のぬけた様にそつぽを見ながら云う。兄君は傍にしゃがみな

がら、

「オヤ貴方は女の着物を持って居ますネ。誰の、紫の君んでしょ、だから私は貴方はまわり合せの好い日に生まれた人だと云うんです。たまにはじょうだんも云うものですよ、サ行きましょう」
片手ではしつかり衣をかかえ、片手を兄君に引かれて障子に入
った。

「アラお珍らしい方が御そろいで行らっしゃいました、君様光君
と御兄様と」

几帳のすぐわきで本を見て居た女がとんきような声で云う。

「オヤどうぞお入り遊ばしてとり乱して居りますが御許し遊ばし
て」

几帳のかげで常盤の君の声がする、沢山の女達は急に鏡を見たり袴の紐を結びなおしたりしてどよめき出す。光君は衣をかかえたまま兄君に手を引かれて女の前に行つた。

「ほんとうにようこそ御出で下さいました。あんまり淋しゅうございますから誰方が来て下さればと思つて居つた所でございます、ほんとうにようこそ」

といかにも嬉しそうにじよさいない口調で云う。

「私の来たのよりこの人の来た方がどれだけ嬉しいのだから知れたものでない」

女は微笑みながら光君の方をチヨイチヨイ流目に見る。

「貴方は何故そんなにぼんやりして居るの、しっかりなさい」

ほんと光君の背を叩いて紫の君の衣を指さして女と目を合せて笑う。女は表では快く笑いながら心の中にはヤキモキして大變飛びかかりたいほどである、あんなに自分をきらった人がどうして来たのかとうすきみわるく妙にも思った。女達は三人を取り巻いていろいろの話をしてはしやいで居る、しばらく話してから兄君は何と思つてか光君を一人のこしてかえつてしまわれた。女達は遠慮した様にみんな次の間に立つて行つてしまった、加なり広い部屋の几帳の中には立つた二人きりになつてしまった。

「どう遊ばしましたの、大變ぼんやり遊ばして」

女はお腹の大きくなつて形のわるくなりまさつたのを恥かしいとも思わない様子でしやべつて居る。

「エエ」

光君はまだぼんやりして居る。

「エエじゃあございませんよ、どう遊ばしたんでしよう」

「……………」

「アラどなたの御めし、お美しいんですこと。どなたのかあてで見ましようか紫の君の、そうでございましょう」

手を出してその着衣を取ろうとする、光君はだまつたまましつかりおさえてはなさない。女はいまいましい様なかおをしてそれから手をはなして、

「貴方、あちらはさぞ面白くつていらつしやつたでございましたよ、お二人でネ。私の上げた御手紙なんかはどうなりました事や

ら」

「面白くて悲しくて情のうございましたよ、貴方の手紙なんかあんな手紙私は見あきてしまった」

「上げない方がよろしゅうございました、貴方は一寸も私の心を察して下さらない」

女はいかにも恨しいと云う様に鼻声で云う。

「私は貴女のなまやさしい手紙を見る毎に身ぶるいが出た。私はチラとききましたよ、貴女のお腹の大きくなつた事生れるややさんのおつつけ主をさがして居る事からあの兄弟のいたちの道切りの事までもネ」

いつもにない早口のよそを見ながら云う調子の妙なのに女は妙

なかおをしながら、

「アラそんな事はございませんよ、誰が申しました。私は一人で淋しくなきながら貴方の御かえりを待つて居りましたのに」

「ほんとにさぞ淋しくかなしかったことでしょう、私たちの道切りをされた時には」

「貴方今日どう遊ばしたんですの、紫の君の着物を御もらいになったのどうか遊ばしたんでしょう」

「……………」

「私はどんなに貴方を思つて居るか、御わかりになりませんの。ほんとうに私はどれほど貴方を思つて居りましょうか、どうぞ哀れとお思ひになつて下さいませ」

「……………」

「私はあなたのそのまぼしい様にお美くしい御かおを見て身にしみる様に、そのうつり香をかぐ時私は私はマアほんとうに」

女は青筋の沢山出た手で光君の手をとった。光君はだまって手をとられて居たが、いきなり女君をつきとばすようにして立ちあがり、

「よろしく、御腹の赤さんに」

と云つて戸のそとに走り出てしまわれた。廊を走つて行く足音がどこまでもつづく。

フラフラしながら部屋にかえつて来た男君は集つて居る女達に一言も云わないで、几帳のかげに入つてしまった、身じろぎの音もしない。女達は眉をひそめて、

「どう遊ばしたんでしょう」

「又、何じやあないんでしょうか」

「妙な御様子ですこと」

などと云い合つて居た。乳母は氣が氣ではなく若しや氣でも變になつたのではないかと時々いろいろのことをたずねる。

「紫の君はどう遊ばしました」

「また無情くされた」

「又、又でございますかマア何という」

乳母のかおは前にもまして曇った。

「もう私の死ぬのは目の前に迫つて居る。私の十八の生命は長く
て短かつたネーお前にもいろいろ御世話になった」

話をすれば間違つたことは云わなかつた、けれ共夜はすること
もなしにボンヤリとおきて坐つて居て昼は他わいもなく寝入つて
居た。そんな日が一週間も綴いた、八日目の日男君はわきに居る
女に、

「母君のところから大きな雛ヒナを一つかりておいで、女びなを」

せいた調子で云いつける。

女は不思議なかおをして、

「おひな様でございますか、何に遊ばすんでございます」

「何故もって来て呉れないのか、私は死んでしまうから」

こわいきびしい調子で云ったので女は氣味をわるがって西の対へ使に行つて間もなく美くしいひなを持って来た。女はそれを光君の前に置いて、

「どうあそばします、御手伝いたしましょう」

「あつちにおいで」

若者はそう云つたまま人形を抱いてつつぷしてしまわれた。女は見かえり勝に几帳のそとに出た。女はそのことを乳母に耳うちをした、乳母の目は急にひかつてぬき足をして光君のわきに行つて見た。急に身を引いて女達の居るところにかえつて来た、乳母

はそこになきたおれてしまった。女達は口々に、

「どう遊ばしました」

ときき乳母は涙にむせびながら、

「とんだことになってしまった、光君様はどうとう気が変になつておしまいになった」

漸くこれだけ云つた乳母は前よりも甚く泣いて居る、女達はかわるがわるのぞいては泣いて居る。

「マア何という御いとしいことだろう、息もかよわない人形に紫の君の衣をきせて生きて居る人のようにしつかり抱えて何かしきりに云つていらつしやる」

若い女達はもう自分の気も狂いそうに悲しがって居る。悲しい

重い空気はこの美しい部屋に満ち満ちてしまった、その事はすぐ西の対へも東の対へも知らされた。母君と兄君は目を泣きはらしながらすぐに駆けつけて来た。几帳はどけられて女達は何を云われても返事をするものがない、気のよわい母君はその姿を一目見た許りでそこに気を遠くしてたおれてしまった。兄君は美しくいしかし物狂おしい光君の手を取って、

「浅ましい姿になってしまった、私は貴方自身よりも悲しい思がする。たった一人しかないこの兄のかおが貴方に分るの」

かおをのぞき込んできくと光君は声をふるわせて遠くを見ながら、

「紫の君ほか私にやさしい言葉をかけて呉れる人はない。オヤ紫

の君、彼の人がそこに居るじゃあないか、誰がいじめたのだ、そんなによわった様な姿をして居るじゃあないか、どこも痛くないの」

と自分の持つて居る人形の手をにぎって肩をやわらかくさすつて居る。そのいじらしい様子を男の兄君さえ見て居ることが出来なかった。母君は言葉もかけないですぐ女達にたすけられながら西の対へかえつてしまわれた。兄君はしばらく女達にいろいろの意得なんかを云つて居られたけれ共、

「出来るだけ早くもとの様になつて下さい、私の一人しかない美くしい弟の人よ」

と云つてそのつめたい手をそうとにぎつて涙をこぼしながらかえ

つてしまわれた。女達はだれでもこの光君を大切に親切にあつかつたけれ共その中でも目立つたのは先の夜に種々のことを問われそれに正しい公平な答をした年若な美しい女と乳母とであつた。物狂わしくなつた光君はけつしてらんぼうをするようなことはなかつたけれ共あけくれ彼の人の着物を着せた人形を抱いてその人の前に居る時の様に話して笑つたり泣いたりして居られた。女達がどんなに親切にして上げても光君は彼の美しい年若な女と乳母の云うことほかきかなかつた。朝夕の化粧、衣更のことなどは皆二人の手にされて常に物凄い様な美しくしさを持つて居た。光君は夜昼のけじめなく美しいことばでかなしいことを口走つて居た。

「ア、大變だ誰か早く来てお呉れ、彼の人を誰かがつれて行つてしまふ、オヤもう見えなくなつた。マア、このしやれ頭はどうしたのだらう、きつとこの中に彼の人も居るに違ひないけれ共、アア私は生きて居られないほど悲しい」

身をもんで人形をしつかり抱いて泣き伏して居られるト急に身をおこして、

「マア何と云ううれしいことだらう、あんなにつれなかつた人がまアどうしてこんなにおとなしくやさしくして下さるの。私の生が新らしく又吹き込まれたほど嬉しい、オヤいなくなつた、どこへ？ 早くさがしておくれ、あああのおおきな川に身を投げようとして居る、ア、もう入ってしまった。あああたしのよろこびは

一時の夢であつた」

こんな様なことは日に幾度となくくり返されることであつた。

朝の化粧の時など、光君は自分の髪をかく前に人形のかみをかき、自分のべにをつける先に人形の唇にべにさし指できようにつけてやつて自分の胸にしつかり抱いて、

「ア、彼の人の唇のべにが私の胸にうつつた、貴女はこんなに音なく私に云うことをきいて化粧までさして下さる」

そんな事を云いながら髪を梳いて居る若い女の手を取つて、

「マア、何と云う美しい手だろう、この手を私はもうもらつてしまつた」

こまかくふるえて居る女の手をしつかりにぎつて自分の頬にあ

てたり眺めて見たりするのを女はさからおうともしないでなすま
 まにされて居る。紅は、この美しくくて物狂おしい人を思つて居
 る、光君が紫の君を思つて居た位、けれ共主従の關係をふかく頭
 にきざみ込まれた女は胸のさけそうな苦しさをしのんでかお色に
 もそぶりにもあらわさないで紫の君との恋の成功するようにとか
 げながら思つて力をそえて居た。恋に敗れた光君は氣が狂つてし
 まつた。女は悲しみながらも自分一手でこの美しい人の世話の
 出来るのをよろこび、又自分でなくては朝の化粧もしないほどの
 光君の心を、物狂わしい人の心とは知りながらもこの上なく嬉し
 く思つて居た。人なみ以上の心を持つて居る人はその世話のしづ
 りにも人並以上のところが多かつた。年とつて世なれた乳母さえ

もその細く親切に氣のつくところ、しずかな様子でよくききわけさせることなどはこの上なく感心して涙を流しては女の手を取つてよろこんで居るのであつた。人々の人望はこの女二人の身のまわりに集つて光君の話の出る毎に紅のことが賞えられた。

けれ共女は若し光君がなおつてしまつた時に自分のつくした真心を思い出して呉れるかどうかと云うことが女の心をはなれることのない心配でもありかなしみでもあつた。

(十三)

この世の中に効の有ると云われる祈り、まじないは金目をおし

まずに行われた。広いむな木を一まわりしてやがて向うの山かげに消えて行くような読経の声や天井裏の年経たいたこの耳をふさいで身ぶるいする魔のものばらいの絃の音、そうしたしめつた、重々しい声や音ばかりがこの館にみちてしまった。日に幾人となくみこや僧はその白かべの館を訪う、その度に人々は下にも置かぬようにもてなしてその祈りやねがいの甲斐があらうがなからうがかえりのひきでもものには銀と絹、これも一つは物狂おしい光君への供養（まだ死にはしないが）と母君達が思ったのである。いくら仏の道に入っても物食いでは生きていられぬ人間の僧、まして近頃は生きて居るかてよりも多くかがやくものをのぞむ僧も一人や二人ではない。その引出ものを目的に、もらったあとは野と

なれ山となれ、仏を金の道具につかつて「私は諸国修業の僧でござります。若君の御不吉をききまして親御の御かなしみも察せられ出来るかぎりは仏にもねがって見ようと存じまして」

殊勝げなおをして人に通じれば、すぐに持仏堂、経をよみながら胸の中では引出ものの胸算よう、思わず氣をとられて経文を一回間違ひびつくりきづいてせきばらいにごまかしてモニヤモニヤモニヤそれでも傍の人は知らぬかおをして居る。やがて一時間よむところは三十分にちぢめて珠数をつまぐって今更のように仏にいのるのは、

「なにとぞ引出物の沢山ございますように」

と云うことばかりで有る。うやうやしく女のもち出した引出もの

を一度はとびかかりたいのをがまんしての辞退、心の中でひつこめるきづかいなしと思つてなのである。こんな犬のような僧も少なくはなかったが、心から、その若君の上をねがったものは必ずしも一人や二人ではなかった。

馬鹿な子ほど可愛い親心、まして心も見めも美しい我子が急に物狂おしくなったのを見て居る母君の心は却つて自分の氣が狂いそう、またたく燭の灯にその枯れたようなかおをてらしながら、「ほんとうにどうしたらよからう、神さまもわりあいにはまもつて下さらず……彼の人にもなじ姿や心が美しくいからそんなかなしいことになったんだらう、——もうまにあわない、何と云つてもなつてしまったことだから」

こんなことを母君は云つて居た。そばの女達は、「ほんとうにあさましいことになつてしまいましたす、まるで私達の園の美しい花が一夜の嵐にみんな散らされてしまったあのような心地に——」若い女はかおを赤めながらこんなことを云つて居た。

「どうにかしてなおせないかしら、まるで私の氣が狂つてしまひそうだ。もうじき五月雨にもなるものを、マア、あのじめじめした雨の降る日に一日中一晚中、魔神の手なぐさみにされて居るように狂うあの人のことをきいたり見たりして居ることを思うと……」

しずんだいんきな声でこんなことを云いながら涙をこぼして居た。女は何も云われないほど氣がふさいでしまつて居るので皆て

んでに溜息をついたりかなしいうたをうたったりして居る、只どうしようどうしようと思うばかりでそれをなおす手段などと云うものは思われないもので有った。

東の対では女達がいくら沢山居ても光君は紅と乳母にほか世話をさせないので只手をあけて淋しいかおをして御経をよんだりいのり文を書いたりして暮して居る。光君はあかりをハッキリさせることはこの頃大変きらいになつたので明障子も生絹にかえたので昼中でも部屋の中はうすぐらい、その中に香はめ入るようなかおりを立てて居る。紅の姿や乳母はすっかりおとろえた形になつてしまつた。やせてつかれた紅はその姿がますます美しくなつた。

「夢の国へ——、夢の国へ、私はあこがれて居るのに」
人形を抱いたまま美しく化粧した光君は云つて居る。

「あの衣をしたててそして着せて御上げ、それから髪も結つてネー、マア、あんな可愛い声で笑つて居る、うれしいから？ 何だか分らないネー、桐の葉がしげつて、夏が来て——、うれしい？ かなしい？ なつかしい方」

わきに居る紅と乳母はソツとかおを見合せた。

「白い鳥がとんで居る、□ラ、ネ、あんな立派に、その背にのつて居る私達は、うれしい、まるで、ネエ」

紅はそつと目をふいた。乳母は目をつぶつて珠数をつまぐつて居る。

光君は手をのばしていきなり紅の手をとった。

「この手と彼の人の手と同じ形をして居る、不思議なもんだこと。あんなきれいなかわい人もやっぱ人間だと見えて、同じ手をもつて居るらしかつたけれど、アラ、彼の人が怒り出してしまった。かんにんして下さい、美しい方。青い雲がながれて、虫がないで、私が笑って、貴方が笑って、人が笑って……、アラアラ、鳥が飛ぶ、私達の心のようにネエ」

手をいきなりはなして、人形をすっかりだいて、コロリとよこになったきり光君はもうねてしまつて居る。

「私達も気が違つて死んでしまつた方がましですワ。ほんとうにこんな御うつくしい御方がネエ、これから先にも、これからあと

にも、こんなことは又と有りますまいものを」

紅はそのみやびやかなね姿を見ながら、しずんだ、おっとりした声で云う、目はうるんで居る。

「エエ悪い神の御もちやになって御しまいになったんです、あんまりねたましいほど御美しくいいのがたたつて。ネエ、それに違いありません。美しくさを司る神がそのあんまりの美しくさをねたんであんなに御させしたんです。大奥様もそう云つていらつしやいましたワ。神にねたまれるほどかがやかしい子を生んだ私もわるいのかも知れないとネ」

紅は斯う云いながらしずかに乳のみ子のようにね入つて居る光君の上に被衣をきせかけながら云う。ねて居たと思つた光君は着

せ終つてそうとひこうとする紅の裾をしつかりとにぎつてほほ笑みながら、

「つれない人、そんなにしずと、マアしずかにして居て、私はこんな泣いて居るのに」

なおぎゅつとにぎりながら急に淋しいかおになって、

「私の命は段々と花のしもに合うようにネー貴方も一緒に行つて下さる？　美しい国に……、青い波につつまれて……やわらかい若草がもえたつて小川の源の杜に赤い鳥が——アアア悲しい！
何故、アア二人きりで、ネエ」

紅は——若い紅は、あこがれの多いような光君の言葉をものぐるおいしい人の言葉とは思えなかった。きをかねるように乳母は、

と見るとねに行つたのか影はない、頬をポツと赤くしながら絵の中の人になつたようにそこにそうつと座つた。ほのぐらい中に二つの白いやさしいかおがういたようにならんで見えて居る。紅はこころの中によし光君はなおつたあとに忘られることで有つても一寸でもこの時間の永いことがのぞまれた。

「どうぞこつちを向いてね。せめてやさしい声だけでも、オヤ、アア、笑つてる、忘れてくれる悲しいことを皆んな——世の中、世の中、何故！ 妙なものだ」

紅の手は光君の手の中に小さく、柔らかくふるえて居る。

「若さま、御存じでございますか、私を？ 誰だか——」

小さい女らしい声できいた。

「誰だつてきくの、私が知らないと思つて居るの？ 私は知つて居るとも、美しくくて私につらくあたる人、思わせぶりの罪人なつて云うことを」

「違います、私は、私は、貴方の御召つかいでございますの」

「ホラきれいじゃあない、この着物は、この模様、何だと思う――アアいやだいやだ、どこに行つたらたのしいところがあるの――美しいほんとうに私は死ぬほど思つて居るのにこの人は」

片手で人形をゆすりながらいたいほど紅の手を引く、かおがぶつかるほど近よせて、

「オヤ、アア、お前はお前は目が三つも有つて、アアきつと彼の人を呪つて居るんじゃないかしら、そうじゃあない？ まあいい、

美しい可愛い、私の死んだ時にネエ、雨が降って花が散って、人は笑ってましよう」

何だか正気のようにだと紅は思つてそつとそのかおをのぞいた。目はいつものように上ずつて居る、かがやきもなく、只あやしくもつて居る、口元にはさみしいほほ笑みとかなしげなといきかもれる、手はふるえて居る。女は自分の事を云われて居るのかと思えばそうでもなし、そうでないと思えばいつの間にか自分のことを云われて居る、つきとばされたりなでられたりして暮して居るこのごろを、死んでしまいたいと思うほどつらく情なく、又はなれにくいほどのしゅう着をもつて居た。紅はこんなことも思つて見た。

「若様は正氣がなくつていらつしやる。思いきつて、思いきつて、思つてゐるたけを申し上げてしまつたつて、御なおりになつてからは御存じないんだから」

けれ共今までながい間の年月包んでけにもさとらせなかつた辛抱を今ここにすっかりぶちまけてしまふことはあんまりあつてななく残念にも思つて居た。

氣の狂つた光君、この人をそうつと思つて居る紅、只乳母と云う名のために心配して居るもの、朝から晩までつききりについて居る紅をうらやむ女達、斯うしたいろいろの人達をつつんだ西の対は読経の声と絃の音と溜息の声につつまれて一日一日とたつて行くので有つた。とうとう悲しみの中に五月雨は来てしまつた。

じくじくと雨の人々の涙のように降る日も、きまぐれにカラットしたお天気になった時も、光君はうす明りの部屋の中に美しい日化粧の姿をよこたえたりして、紫の君の人形をすっかりとかかえて美しくいうわことを云いながら只淋しい秋の来るのをまつて居るばかりで有った。

(十四)

五月雨が晴れると急に夏めいてようやく北にあるこの館にもむしあつい風は吹くようになった。人々の夏やせはいつもの年よりは、目立って見えた、蟬もないた。日ぐらしも。草むらにほたる

は人だまのようにとんで、朝がおは朝早くさいて日の上らない内にしぼんでしまった。こんなことを毎日くりかえしてもものうい夏にすぐわぬ力のない日を送つて居る内に、もう、桐の葉の一葉又一葉凋落の秋をさとすように落ちはじめた。

「もう秋ですものネー、春の御宴の時からもう冬をこせば一年になりますもの」

人達は今更のようにこんなことを云い合つた。

薄の穂に桐の梢に秋は更けた。庭のやり水がかれて白い、洗われた石がみにくく姿をさらして居るのを人達は何か知れないものをさとされるような気がしてそれをじつと見ては居られないように有つた。

「この秋、若君は御なおりなされなければ悲しいことは有るに違いない」

こんなたよりのない、あきらめたようなことばも誰云うとなく口々にのぼった。

「なまじ生きて居て悲しいつらい目に合わせるよりはね」

涙も枯れたようになった母君は救の言葉を見つけたようにこんなことを云つて居た。紅や乳母はこのことをきいて、

「一体だれがそんなことを云いだしたんでしよう」

「誰だか知らないけれ共、あんまりじやありませんかねエ、私達はいじにも御なおし申さなくつては」

怒りながらこんなことを云い合つて居た。

どことなくしずんだことさら秋の悲しさの身にしみるような日の夕方、九月はもう二十日になつて居た時の夕、紅は乳母にかわつてもらつて昨夜のてつ夜に疲れた体を几帳のかげにそのまま横えてねるともなし、おきるともなしにかおにかんばしいかおりの額髪をかぶせたまんま居ると、そろつと足音をたてて近よつた人はその額がみをよけて横になつて居る体の子供をするようにだきおこした。夢と現のさかえに居た人はびっくりして目をあけると、美しいかおにほのかな紅を染めて自分の体をしっかりとかがえて居る。身をひいてどけようとしたけれども、その手をゆるめないでしっかりとかがえたまんまで、

「御免、ほんとうに長い間いろいろ世話をやかせて」

声ははつきりとして目はおだやかになって居る。

紅はハツとした。「若しか若しか、今まで変で有ったのは、わざとして居たのではあるまいか」おどろきとよろこびにふるえながら、

「若様、御わかりあそばしますか、御気はたしかでございますか」
「わかりますかつて？ わかつてるとも、美しくてつれなくて——私は気がたしかときくの？ たしかともたしかとも只私はかなしきに、なさけなさに……きれいなところは有るものをネエ」
やっぱり正気にかえったのではなかった。

「ほんとうにネエ、私はまぼしいようなかがやきのある藻の林の中に身をしずめてじつとして居たくなってしまった。そしたら、

ネエ、こんな悲しいことや辛いことは有るまいもの」

しみじみと正氣の人の云うように云つて女をだいたままたおれ
てしまった。女はあわてて身をもがきながら、

「御はなし下さいませ、御はなしはどんなにでもうかがいましよ
うから」

おだやかに光君は手をはなした。

「ネ、どうぞ私のことはいつまでも忘れないで御呉れ、ソラ、鳥
がとぶ、雲がとぶ、心も——」

光君のいつになくおっとりした口のききぶりや、しみじみとし
た口つきに紅はもしや何か変つたことはないだろうかと思わ
れた。

「忘れはいたしませんとも、死にましても、どんなことがあつても忘れなんかいたしますもんか」

光君はこのことをきいて安心したように立つと、又人形をだいてはなされないようにじつとそれをだきしめたまま、日は暮れてしまった。灯のかげに光君と二人の女は何も云わずに、何かに見込まれたように、またたく灯かげを見つめて居た。

「ネー若し、今日は若様はいつになくしみじみとね、涙の出るようなことばかりおっしゃって御いででしたの、もうほんとうにネー」

「マアそうでしたか、どうなさったんでしようねエ。ほんとに御なおりになって下されば、私達もほんとうにどんなにうれしいか

知れないのにネエ、やっぱり悪い神様がいたずらをなさつていらつしやるんでしようよ」

乳母はこんなことをそぷを向きながら云つて居る。紅は何となく眠氣がさして来た。頭ばかり用^{つか}つて眠る時間の少いために、うつむいたまま形をくずさないでしずかに眠つて居る。光君は人形を抱いたままだまつて目をつぶつて居る。乳母はだまつて光君の様子を見つめて居る。

夜は段々更けて行く、いつまで立つても光君は動こうともしない。乳母もいつの間にか眠りたくなつた、ついうとうとなつてハツと氣がついて又首をもたげる、又うとうとなる、又ハツときづく。……

夜明にメツキリ涼しくなった、一番さきに紅はおどろいて目をさました。紅におこされて乳母も、

「有難う、ねまいと思つてもついつかれて居るとほんとうに年甲斐もないことをしてしまつて」

乳母は目をさましてから年若な紅におこされたことを大變恥かしいと思つてこんなことを云つて髪をかきながら、

「オヤ、いらつしやいませんよ、若様が。一寸、アラ、大變だ、どうなすつたんでしよう」

「エ？ 何ですつて、若様が——いらつしやらないんですつて？」
「エエ」

「そんなことはないでしょう、だつて宵の中にいらつしやつたん

ですもの」

「ほらごらんさい、ネ、被衣がぬいであるでしょう。そろもうよつぽど前に御出になったと見えてもうひやつこくなってるんですもの」

「マア、どうしましょう、私が居ねむりをしたばかりに、ほんとうに相すまないことになってしまつて」

「ほんとにネー、どうしましょう。とにかくいて見ましょう、御きのどくですけれ共ほかのかたの御部屋を、まさか家のそとにはいらつしやらないでしょうからネー」

「ほんとにそうだといいですけれ共ネー」

「貴方紫の君さまのところへ、私は大奥様と殿様のところへ行つ

て来ますから、どうぞ」

二人の女は女特有の重い音を立てて右と左に分れて走って行った。

「一寸、どなたかお目ざめでございますか、光君のこの紅でございます」

うわずつた声で大きくよんだので年とった女が、

「オヤ、マアどうなすったんでございます、光君がどうか……？」

「あの若しやここに御邪魔致しては居りませんか、御見えにならないんでございますが——」

「アラ、一寸御待ち下さつて——『一寸一寸さつきこの前で何だか悲しいうたをうたっていていらっしやったのは光君だったでしょ

う』やっぱり。もうずっと前三時ほど前にここの前で細い御声で何か歌を御うたいでございましたが、やがて高い御声で御笑いなさりながらどちらへか御いになったのでございますよ、マア、それからどちらへ御こしになったかはわかりませんが」

「そうでございましたか、オオ、どこへいらつしやったのでございましょう。実はさきほどから一寸二人ともとりといたしましたらもうどこへか御出になってしまったのでございますもの」

紅は礼を云うのも忘れて東の対にかけもどると、殿も母君も外の人達も御おきになってくらやみの中におどろきとかなしみにとらわれて立つて居る。

「わかりましてす」

紅はたったそれだけ云ったきりで座ってしまつて何も云えない。

「どうなすつたの、早くおつしやいよ」

外の女達はすすめるけれ共息ははずむ、自分の罪はせめられる。
「只今紫の君様の御部屋にうかがいましたらもう三時も前にあの御部屋の前で悲しいうたを御うたいでしたが、高笑いを急にあそばしてどこへか行つて御しまいあそばしたと云うことで……」

紅はうつつぷしたまんま斯う答えた。

「エ？ 紫の君の部屋に行つたつて？ どうしたんだろう」

母君はふるえた、でもあきらめたような声で云う。人々の頭には雷のように、

「死んでしまつた」

と云うことがひらめいた。けれ共各々はなるたけそうでないようにといのつて居るけれ共どうしてもそれが思われてならなかった。いきなり向うの細殿を小供の足音でかけて来るものが有る。うすい着物の上に片っ方だけ桂をうちぎひきかけて走つてきた童は、人々のかおを見ると急にポロポロと涙をこぼして幼いもののだれでもがするようにしゃくり上げてどもつてばかり居る。

「どうおしだ、何があるの、云つて御呉れ」

殿はやさしい声でその手を背におく。

「申し上げます、わ……わかさまが……彼の奥の池に紫の君様……の……御お、衣がう、ういて居りますと只今申して来たものが……ございます……」

「エー？ 奥の池に——紫の君の衣が……」

殿のかお色はにわかに変つて唇はワナワナとふるえて居る。女の人達はもうそのわけを察してもう声を立ててなきくずおれて居る。

「私達の心で思つて居て口に出さないで居た結果がとうとう来た。彼の骨をけずるような悲しみはまだ年の若い情のかつたあの人にはしのべなかつた、だからまずもののわきまえないように気が狂つたのだ、それでもまだ苦しいつらいことが有つたと見えて永久に苦しみのない静かな水の底に柔い藻に抱かれてしまったのだろう、秋のつめたい水の中も情ない人の世よりはあたたかいと思つたと見える……人なみよりも勝れて美しい人は命が短いと云

う昔からの定規に彼の人ももれなかった」

殿はさとすようにまた人の世の定まった情ない事をさとすように云い終つてそつと目をとじる、耳のそばでは形のないものが、
「来るべき筈の運命ときまつて居たことを今更歎くことは、あんまりおろかすぎる事じゃあないか？」

斯う云うようにきこえた。涙は目からポロポロ頬をつたわつて落ちる。散つた花のように身をなげ出して声をおしまず女達の泣いて居る間に紅一人は目をとじてうつむきもしずそのはつきりしたかおを蠟のように青くなつて氣を失つたように身うごきもしない。母君はふるえた声で、

「みんな私の心弱いためにね——ほんとうに大変なことになつて

しまった。そうわかった時に私が口をきいて早くまとめてしまえばよかったものを、ほんとうに……かんにんして御呉れ」

こんなことを云つて母君は今更のように涙をながした。

殿は、みどりの髪をながく水底にわだかまらせて、白いかお、白い手をやわらかい娘のような藻はそつと包んでその間を赤い小老蝦はものめずらしそうに外の世界からフイに來たこの美しい御客様のまわりをまわる。始め体の上にしんなりと被つた紫の君の衣は藻のなびきにういてみどりの藻の上をうす紅の衣がただよつて居る、その絵のような又とないものあわれな様子を想像しながら、

「美しい人にふさわしい涙の多いは果ない最後であつた、けれ

共今更その骸をさらすのはあんまりむごいことで有る。あのままにしていつまでもそのしずかさをさまさないようにしてあげよう」
 涙の中に殿はこれ丈考えたけれ共、母君は只泣くばかりでどうにもしようがなかった。只

「ほんとうにすまないことになった、私のために……乳母も紅もあんなに世話をして呉れたのに、どうぞこの生る甲斐のない母をうらんで御呉れ」

こんなことばかり云っていた。

「□業でございましたよう、私の御世話をいたしましたのも若様の御なつき下さいましたのも生れる前から神の定めて御置きになったことでございましょう。私は誰も恨むはずの人はございません、

只……只私の呪われた運命を思うのでございます……つくづくと……」

紅は斯う云つてはじめて涙をながした。

「御前行つてね、そう云つて御呉れ、池は何にもかまつて御呉れでない、するようには私自分で行つてするからとね……あんなに美しくしてやさしかった人をどうして……」

殿は泣きじやくつて居る童に云いつけて向うにやらせた。

涙の止まつて気の狂いそうになつた母君は何も云わず何とも考へることも出来ないで、ぼんやりとしたかおをして、泣きたおれて居る沢山の美しい衣の色を見て居る。女達のかおは涙に白粉がはげていたいたしく見えている。

「そんなにおなきでない……あんなに美しい人をなくしてしまつたのは皆私達が悪かつたばかりなんだから、ネー、そうお思いじゃあないかい。お前達の涙であの美しい人の色をあせさせるといけないから——どうぞ」

そう云いながら自分も涙にぬれたかおを袖でかくしながら、

「母様、西の御殿にかえつておやすみあそばせ、あとは私がい様にとりはからいますからネー」

わきに居る女に目くばせして、

「つれて行つてお上げ」

と云つたので、地味な色とはでな色の二つの着物はさびしいなにかの影を追う様に西の御殿へ細殿をつたつて行く、西の御殿の女

達は夢からさめた様にそのあとにつづいた。光君の部屋に居た女達は今更とりみだした様を気がついたように入ってしまった。あとにはだまってかなしみのためと絶望のために青白いすごいほど美しくなった紅が、だまって胸を抱く様にして坐つて居る。殿も、そのわきに他の女よりも強いかなしみにとらわれて物狂おしい様な紅の様子を、前からの事に引きくらべてよけいかあいそうにおもわれたのでなぐさめるつもりで、

「氣をしつかり持つて御呉れ、紅、人の命がはかないものだと言う事、人間と云うものは弱いものだと言うことは御前も前から知つて御いでだろう……悲しい事つらい事は人を玉にするみがきだと御思い。御前はまだ若いんだもの、末にどんなに楽しいうれし

い時もあるんだからネー、私は口ばかりでなく、心から御前の心
のかなしさを同情して居る人の一人なんだからネー」

やさしい思いやりのある声でさとして、殿はマーブルのように
かたくしまった女のかおをのぞき込んだ。

「私はあの人の可愛らしい霊がしずかにやすまって居られる様に
しなくてはならないのだからネ、私はこれから池に行つて見るか
ら……」

悲しい心にさわる事を気づかう様に云う。

「まことに恐入りますが……私もお連れ下さいませ。御心配には
及びませんでございます、もう落つきましてすから」

はつきりとした口調で落ついて云ったので殿は少しおどろきな

がら、

「行きたいのなら御いで……だけれ共私にこれ以上かなしい目にはあわせないで御呉れ」

紅は殿の今いった言葉がその意味以上にようわかった。

「大丈夫でございます」

シャンとした気丈な様子をしてそのあとにつづいて池に降りた。向う岸にならんで居る木の小さく見えるほどの大きさ、まわりの草は此の頃的时候に思い思いの花を開いてみどり色にすんだ水と木々のみどり、うすき、うす紅とまじって桔梗の紫、女郎花の黄、撫子はこの池の底の人をしのばすようにうす紅にほんのりと、夜露にしつとりとぬれてうつむいて居る。

かおの白い衣の美しい人達はその中に足元をかくして立った。池の面は人々のかなしみも何にも知らぬがおにしずかにみちて居る。すくい上げられた紫の君の着物はその裾からつゆをしたたらしながらわきの柳の枝にかけられて居る。人達は一まわりズーツと見まわしてから目をつぶった、□□□の口からはかすかな祈りのこえがもれて居る。紅は□にぴったりとすわって、深く人よりも大きなことを祈るように目をねむったまま動かなかつた。

「このままにして置いて御呉れ、一寸でもの水をさわがせない様にネ……」

殿はまわりのしずけさをやぶってわきに居る男に云いつけた。いつまで立ちつくしても思いはつきないと云うように人達は立

ちつくして居る。

「もういったらいいでしょう、きりがいいから」

去りがたい思いをしのびながら殿は云った。

ことばに二人たち三人立ちして、たいていの人は家に入ったが、紅はまだ坐つて居た。殿はこの様子をいぶかつて、

「紅は大変かなしんで居て、御らん、あんなにして居る。私はもう去らなければならぬいけれ共、あとが少し気がかりで居るからものかげから見居て居て御呉れ」

わきに居るまだ若い男に云いつけて、しずかに池の方に会しやうくをして家の中に入った。

だまつて坐つて居た紅は足元もあやういように立ち上った。

「ああなんでももうおしまいになつてしまつた、……私の望も、よろこびも、たのしみも、命までも……」

しずかにかげのようにあるき出した。物かげの男は池に身を投げはしまいかとそればかりを氣にして一足うごくごとに自身も一足ずつうごいて居る。やがて足元を定めて紅はキチンとしまつたかおをして家の方にあるき去つた。物かげの小男はなんとなくあつけないような心持でそのあとにつづいた。

前にもました、重くるしいかなしい心持は家の中にみなぎつて東の対の女達が光君のものために同じような黒い衣物を着て居るのはよけいにいたいたしかつた。

その日の晩、東の対の光君の御部屋からと云つて童が一つしつ

かりと封じた文をもつて来た。何かといぶかりながら上包をとると、

「私からうちつけに文などをさしあげましてまことに恐入ります
が、私の心に同情下さいますなら御開き下さいませ、もしそうで
ございせんならこのまま御すて下さいませ」

と紅の手でこまかくうす墨でかいてあつた。殿は好奇心にかられ
て中を開いた。細かく長く書いて有る、はじから順々によんで行
くとこんなことが書いてあつた。

「どうぞ御ゆるし下さいませこんな失礼をいたします事を。私は
今までどう云う心持で暮して居ったかと申す事を御はなしいたそ
うと思いたちましたので……何故と云うわけは御きき下さいませ

んように。私はどんな身分で今までどんなかなしい事に出合つかと申すことも御存じでいらつしやいます。私は……まことに何な事でございますが、光君様を御したい申して居りました。けれども、私は、その事を表にあらわしてよい事かわるい事かと申すことは、幸父からうけついだ理性ではんだんする事が出来まして。それで私達は今まで一寸でもそんな事を氣をつけられる事もございませんでしたし又氣取られるような事もいたしませんでした。

その内光君様が西の対の君さまのところへ御通いあそばす様に御なりになりましたからも、その始つから私は光君の御望の叶わないと申すことは存じて居りましたけれ共、私は自分の心にひきくらべてその御苦しさを御察し申上げて二人の中をどうにでもして

と存じて西の対へもいろいろと云つてやりました。私は氣の狂いそうにかなしい中に人よりも一寸でもまさった事をする^と申すのがなぐさめで居りました。紫の君さまの御心づよさは光君の御心を狂わせてしまいました、私は自分の貴い玉にきずがついたように感じました。

毎日、毎日、私は自分の命にかえてもと思つて御世話申しました。光君はよく私の云う事を御きき下さいまして何でも私の手でなければ御氣にめさないほどでございました。それが又どんなにうれしかったでございましょう、光君様の御体が御なおりあそばしたならこんなに御世話申しあげた事も御忘れあそばすだろうと存じますと……それもかなしみの一つでございました。

いつまでたつても光君様は御なおりになりませんでした。春が
 すぎ夏となつて又秋をむかえても、……随分長い久しい間でござ
 いましたが、その間、私は幾度か正気のなくつていらつしやる光
 君に思つてゐる事をうちあけて申しあげて仕舞おうかと存じまし
 が、それもわるい事と思う心がおさえつけてしまつて居りました。
 私は只生れながらに一生光君さまの召使として理性の力で悲しい
 つらい事をたえて暮して行かなければならないものに定まつて居
 たのだと思いきめて居りました。そしたら、今日、この悲しい、
 はかない事に出来でわしました。私はこれも運命と存じて居ります。
 私の今まで思つて居りました事は光君さまの御かくれと一緒に弔
 むられてしまつた事でございますが、私は思つた事がございます

ので、明らさまに恥かしさをしので申しあげます。女としてあまり大胆すぎる事で又あまり露骨すぎて居りましようけれ共私は今日となつて心にわだかまるかくし事のあるのは、と存じましたので……、私は、この愚な女らしくない女を人より以上に御いたわり下さいますのにすがつて御心のひろい殿に申しあげたのでございます。どうぞ御ゆるし下さいまして……いつかは御わびをする時もあるうかと存じます」

斯んな風にはつきりと書いてあつた。殿はなんとも云うことは出来なかつた。今時の女、それにまだ二十にもならない女が大胆に自分の思つて居ることを人に告げる、その事も主人の弟を思つて居た事を主に告げる、あまり大胆な仕業であるが――

殿は斯う思つて迷つた、けれ共常からどこか毛色の変つた学問の深い考のある女の事だから何か感じた事だろうと思つて居た。けれ共最終の、

「いつかは御わびをする事もあるうかと存じます」

と云うのがきにかかつてもしかすると書おきでもありあしないかとさえ思つた。けれ共、あの位考のある女が今死んでどう云うわけがあるかと云う事がわかつて居るであらうと思つて幾分かの安心は持つて居た。

其の晩はもとより寢床に入つたものはなかつた。外の女達はしずんだかおをして居ながら——又経をくりかえしながら退屈しにぎに時々低い声でしゃべつて居たけれ共、紅一人は持仏の室に

入ったきり夜一夜かねをならし、通る細いしおらしい声で経をよんで居た。経の切れ目切れ目にはかすかに啜泣きするらしい様子が女達の心を引きしめてだらしく居ねぶるものなどは一人もなかった。

夜が明けて各々のかおがはつきり見えるようになると又かなしみも明るみにハッキリかおをだしてきのうの今頃と云う感じがたれの頭にでもあった。化粧もうっすり黒い衣をきなくちやならないのがまだこの部屋に来てまもない女等は辛いように思われた。早い内に殿も身に喪服を着て、

「どんな様子だい、いくら悲しいと云つてもあんまり力をおとさないでおくれ」

斯う云われると今更のように涙が流れ出して云い合せに女は泣き伏した。

持仏の間の中では相変らず鐘の声と経の声がきこえる。

「誰だいあすこに入つて居るのは？」

「紅でございましょう、昨夜は夜中入つて居つたのでございます」と云つたので戸を細目にあけて中に入ると香の香りのもやの様にただよう中に水晶の珠数をつまぐりキッチンと坐つて経をあげて居る横がおは紅にちがいない、貴いほど、気味のわるいほどひきしまつた、すごい美しい様子で有つた。足音はしずかに衣ずれは立てわきに坐ると、殿はおどろいたように「オヤ」と云つた。

無理ではない今まで丈にあまつて居たかみは思いきりよく根元

からきられてそのしとやかななで肩の上に、ぞっくりそろった末をゆるがして居る、そのつや、その香りはもと通り紫とかがやき紫の香りを立てて居るのがしおらしくった。

経は紅の口からまだほとばしって出る、まるでわきに人の居ないように……殿はその姿を絵像を見るような人間ばなれをした氣持で見て居た。経の切れ目になった時、紅はつと坐を下つて手を支えた。

「昨日はまことに……妙なものを御目にかかけまして相すみませんでした、どうぞ御ゆるし下さいまして。御覧の通りになりますのに人にかくした、ことに殿様のようにいろいろ御恩になつて居ります御方にかくした事が有つてはと存じましたので……」

ひくいけれども落ついた立派な態度と声でいった。乳母も髪をおろしてしまった。母君もおろしてしまいたいと云つて居られる。こんな事を思つた殿は、冷い風の吹いて来るような心持で、

「私は、御前のたれよりもまことの心をもつて居て呉れたのを有難く思う、今まで有つた事、私はその事についてしたお前の行がいかにも立派であつたと思う。私は死んだ人にかわつて御前のつくして呉れる心地を感謝するのだから――」

紅はだまつてきいて居た。

「有難うございます」いかにもさとつたようなひやかな声はしばらく立ってからその口をもれた。

紅はこれから乳母と共に別に一むねをもらつてそこにほんとう

の尼の生活をする事にきまつた。光君の部屋は兄君即ち殿の持ち部屋になつたけれ共、もとのまま光君の美くしい色の衣は衣桁に几帳も褥子も置いて有つたところに置いたままになつて居た。

人達の頭の中からは中々いつまで立つてもこの悲しみはぬけそうにもなかつた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十八卷」新日本出版社

1981（昭和56）年11月25日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第6刷発行

※底本では会話文の多くが1字下げで組まれていますが、注記は省略しました。

※（十一）～（十四）は、底本では、縦に並んだ漢数字を、横向きの丸括弧で挟むように組まれています。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2009年5月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錦木

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>